

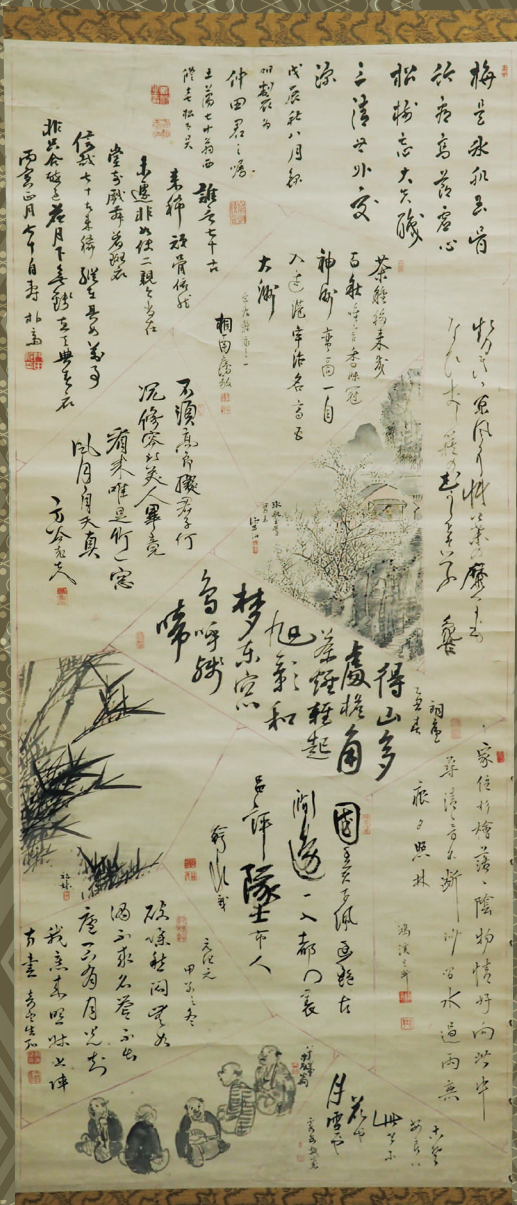


三島中洲

Chushu

近代と 其六

Modern



明治一五〇年

三島中洲と近代

— 其六 —

— 近代日本と岡山の漢学者たち

はじめに

二松學舎大学 教授 町 泉寿郎

平成一六年五月から有志によって学内で始めた三島中洲研究会も一五年目に入り、合計一三〇数回を重ねた。昨年一〇月一〇日の本学創立一四〇周年事業を経て、現在は一〇年後に刊行予定の一五〇年史の編纂事業が始まっている。過去の踏襲や顕彰に止まらない広い視野からの歴史の検証がいまこそ求められている。

近年、岡山県各地と本学との関わりは着実に広がりと深まりを見せている。もともと二松學舎側は明治五年上京後の中洲のことはある程度まで把握しているが、中洲の郷里備中の歴史や人間関係については十分とは言えなかった。逆に、郷里では地元の間人情報が豊富な半面、中洲とその師友が幕末明治史上どのような意義を持ったかは知悉しない憾みなしとしない。そのような相互の認識がかみ合って、特に平成二八年に倉敷市と本学が交流協定を締結して以来、学内関係者は毎年、倉敷・高梁など高梁川流域を中心に講演や資料調査に訪れる機会が増え、中洲と郷里の関わりに関する我々の認識もより多様さと確かさを加えてきたように思う。

そこで、六回目となる今回の展示では、副題として「近代日本と岡山の漢学者たち」を掲げ、方谷―中洲の学統を自明のものとして中心に据えるのではなく、備前・備中・備後（美作も加えるべきであるが）の諸派にわたる漢学者群像の中に方谷・中洲を置いてみることによって、新しく見えてくるものを捕えようとしてみた。閑谷学校再興と山田方谷の関係は周知のことに属するが、そこに中洲を加え、また備作諸地域の動向を考えると、更に解明すべき点がありそうに思う。明治維新一五〇年を迎える今年、それぞれの地域がどのように近代化過程を歩んできたか、様々な取り組みがなされている。今回の展示は「漢学」を窓口としたその一つの試みである。

平成三〇年七月

三島中洲と近代 ―其六―

―近代日本と岡山の漢学者たち

はじめに (町泉寿郎)

目次

I 〈備前〉 閑谷学校の存続に尽くした人々 (頁)

16	河本磯平死亡通知 (明治32年2月)	14
15	釈日正編・芳野金陵撰『譚故書餘』	13
14	山田貞芳書簡 (明治41年10月)	12
13	備作恵済会予算書類 (大正2年)	11
12	岡山感化院関係資料 (明治24年9月)	10
11	西薇山顕彰碑の募金依頼 (明治37年6月)	9
10	岡本天岳書簡 (野崎万三郎宛 明治33年12月)	8
9	万波忠治書簡 (野崎万三郎宛 明治33年11月)	7
8	難波抱節筆・帆足万里撰『窮理通』	6
7	岡山県医学学校生徒役員名簿 (明治21年)	5
6	保嬰会会長選挙得票資料 (明治21年1月)	4
5	香川真一書簡 (野崎万三郎宛 明治10年代)	3
4	西薇山書幅	2
3	井上蘭台書幅「贈左長卿」	1
2	武元登々庵『古詩韻範』	4
1	三島中洲筆・藤田東湖撰『熊沢蕃山伝』	

II 〈備中〉 山田方谷と備中松山藩の漢学の系譜

33	野崎龍山書簡 (田辺碧堂代筆)	17
32	田邊碧堂『碧堂絶句』『改削碧堂絶句』	16
31	田邊碧堂入学願書	15
30	児島星江書簡 (山田濟齋宛 昭和6年9月)	14
29	進鴻溪辞令 (進氏寄贈)	13
19d	進鴻溪書 (「儒者文人寄合書」のうち)	12
19c	阪谷朗廬書 (「儒者文人寄合書」のうち)	11
28	三島中洲撰「亡友林抑齋墓碣銘」拓本	10
27	三浦佛巖書幅	9
26	川田薨江書簡 (三島中洲宛 明治29年1月)	8
25	三島雷堂「見聞録」	7
19b	三島中洲書 (「儒者文人寄合書」のうち)	6
20b	三島中洲書「読黄葉夕陽村舍詩」	5
24	山田璋書簡 (山田濟齋宛 昭和27年10月)	4
23	山田琢書簡 (山田濟齋宛 昭和27年1月)	3
22	山田濟齋書幅 (設楽氏寄贈資料)	2
21	山田濟齋「詩文稿」 (山田氏寄贈資料)	1
20a	山田方谷書 七言絶句「咏中興諸将之一」	4
19a	山田方谷書 (「儒者文人寄合書」のうち)	4
18	奥田楽山書幅	4
17	西山拙斎「拙斎西山先生詩鈔」	4

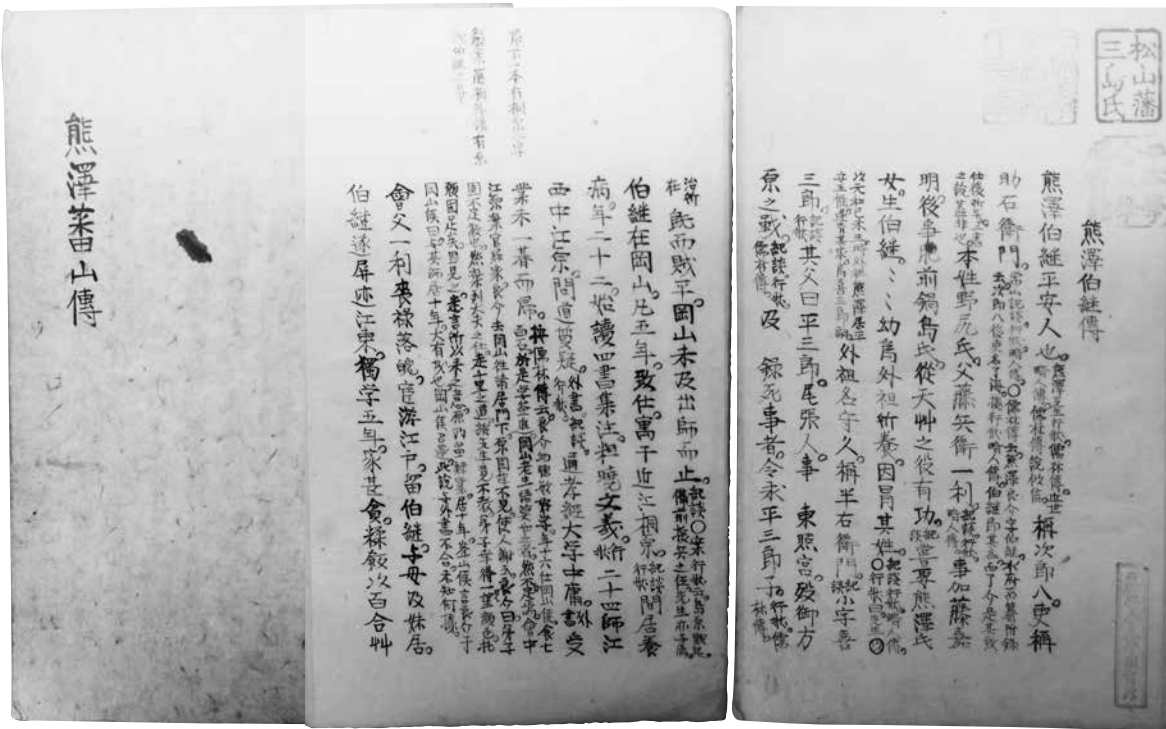
III 〈備後〉 福山藩の漢学者たち

38	濱野箕山書簡 (三島中洲宛)	36
37	森枳園「森枳園誕節之宴 (開催案内)」	35
36	小島成斎先生墓表	34
35	小島成斎書幅	33
19f	江木鰐水書 (「儒者文人寄合書」のうち)	32
19e	門田朴斎書 (「儒者文人寄合書」のうち)	31
34	関藤藤陰書簡 (山田方谷宛)	30

凡例

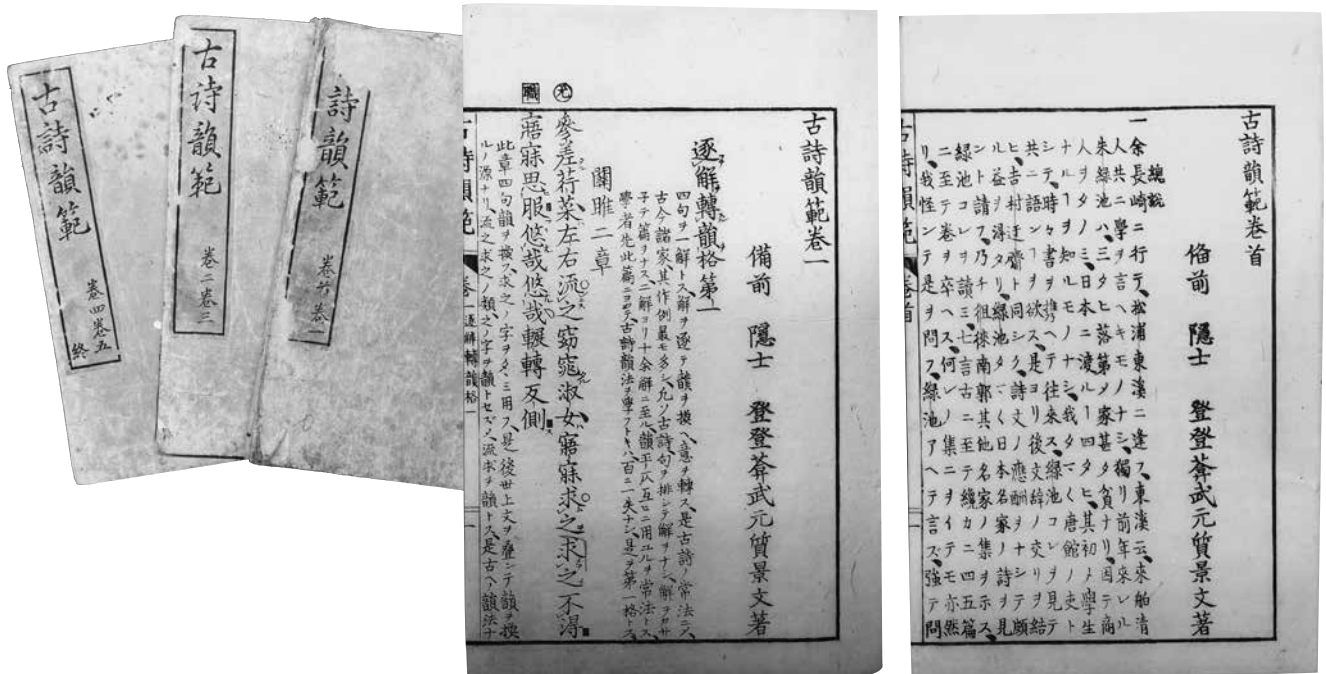
- 一、本書に収録した資料のうち、二松學舎大学所蔵資料には、請求記号・整理番号等を略記し、個人蔵の資料には星印を附した。
- 二、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。
- 三、人名表記は、姓号を基本とした。
- 四、図版解説は、川邊雄大・清水信子・町泉寿郎が分担し、各文末に (K)、(S)、(M) と略記した。
- 五、本書は二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」の研究結果報告を兼ねるものである。

I 〈備前〉 閑谷学校の存続に尽くした人々



1 | 三島中洲筆・藤田東湖撰『熊沢蕃山伝』仮綴1冊（三島文庫）

熊沢蕃山（1619～1691、名は伯継、字は了介、別号に息游軒）は、京都に生まれ、中江藤樹に陽明学を学び、岡山藩主池田光政に仕え、治水・救民などに治績を上げる。しかし晩年は幕府側から批判を受け、古河藩に預けられ、その幽囚中に死去。展示品は藤田東湖の『熊沢伯継伝』を中洲が書写し、また他本との校異や注釈など書入をほどこしたもの（S）。



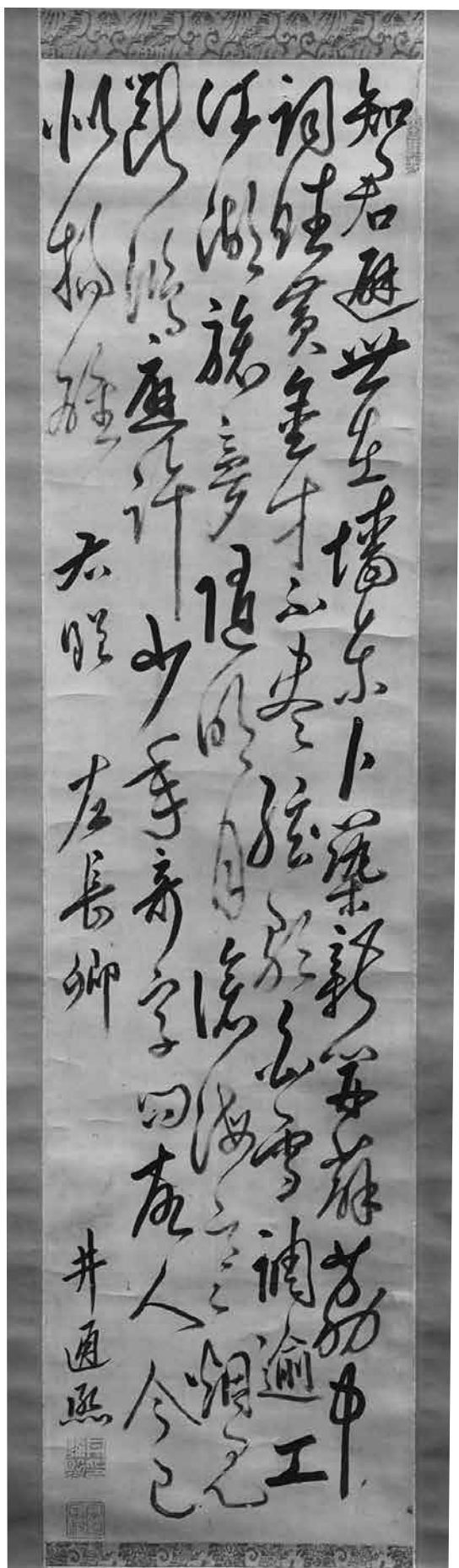
2 | 武元登々庵『古詩韻範』5巻3冊（天保2年〈1831〉大坂河内屋茂兵衛等刊）☆

武元登々庵（1767～1818、名は正質、字は景文、通称は周平、別号に行庵）は、備前和気郡北方村に生まれ、弟君立（勇次郎）とともに閑谷学校に学ぶ。のち柴野栗山に師事し、長崎で蘭学をおさめ、また菅茶山・頼山陽・田能村竹田・浦上春琴らと交わる。『古詩韻範』は日本人に馴染み深い近体詩（絶句・律詩）ではなく、古詩の韻に関する理論書で、唐詩を基本としてその例を示す。武元君立は閑谷学校の教授（1813～1818）に登用されている（S）。

3 井上蘭台書幅「贈左長卿」☆

井上蘭台（1705～1761、名は通熙、字は子叔、通称嘉膳）は初め林鳳岡に学んだが、徂徠学に接近し、門下に井上四明・井上金峨・沢田東江・関松窓らを輩出しており、折衷学の祖といふべき儒者である。蘭台・四明父子は岡山藩儒として主に江戸藩邸で藩主子弟らに学を講じ、岡山藩領における藩校教育には殆ど関与しなかった。蘭台の次世代にこの学統から寛政異学禁令に際して指弾される学者たちが出ていることも、江戸後期の岡山の藩学を考える上で一つのポイントになるであろう。展示品は、若くして江戸に遊学した学徒佐々木琴台（1744～1800、名は世元、字は長卿）に贈った七言律詩（M）。

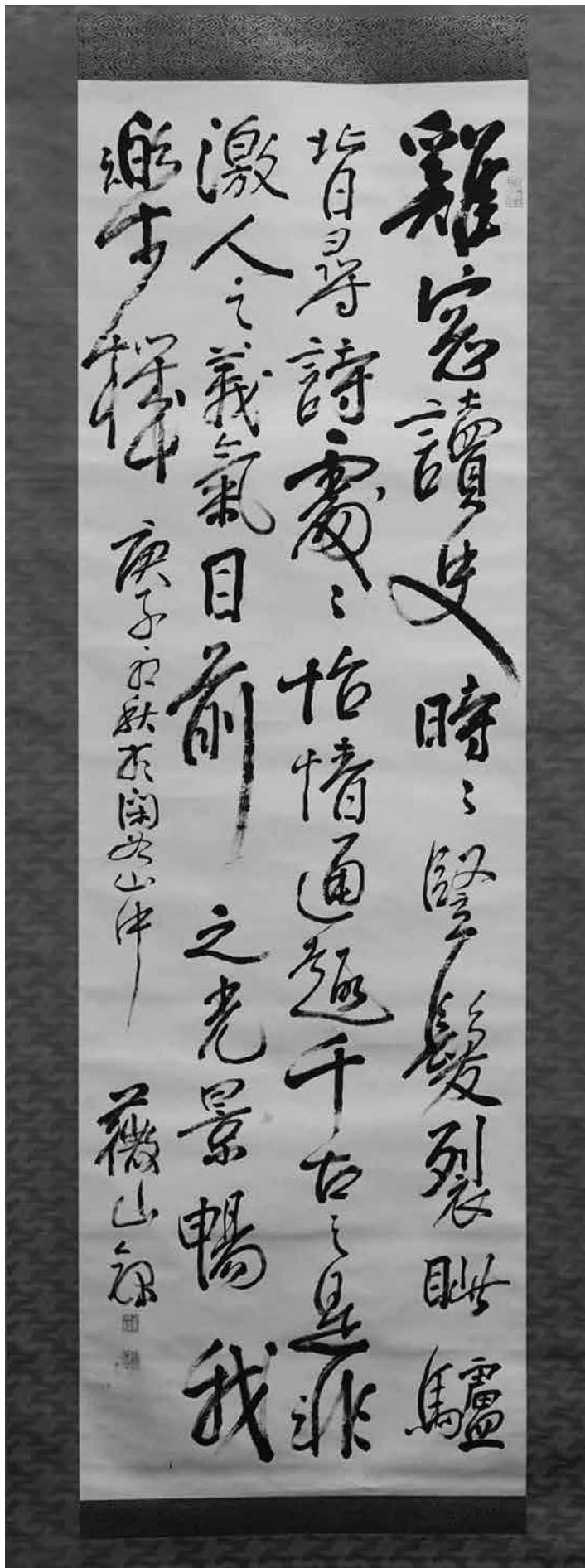
（翻印）「知君避世在墙東 卜築新開薛荔中 詞賦黄金才不尽 絃歌白雪調逾工 江湖旅夢隨明月 滄海寒烟見斷鴻 應許少年奇字問 故人今已似揚雄 右贈左長卿 井通熙」

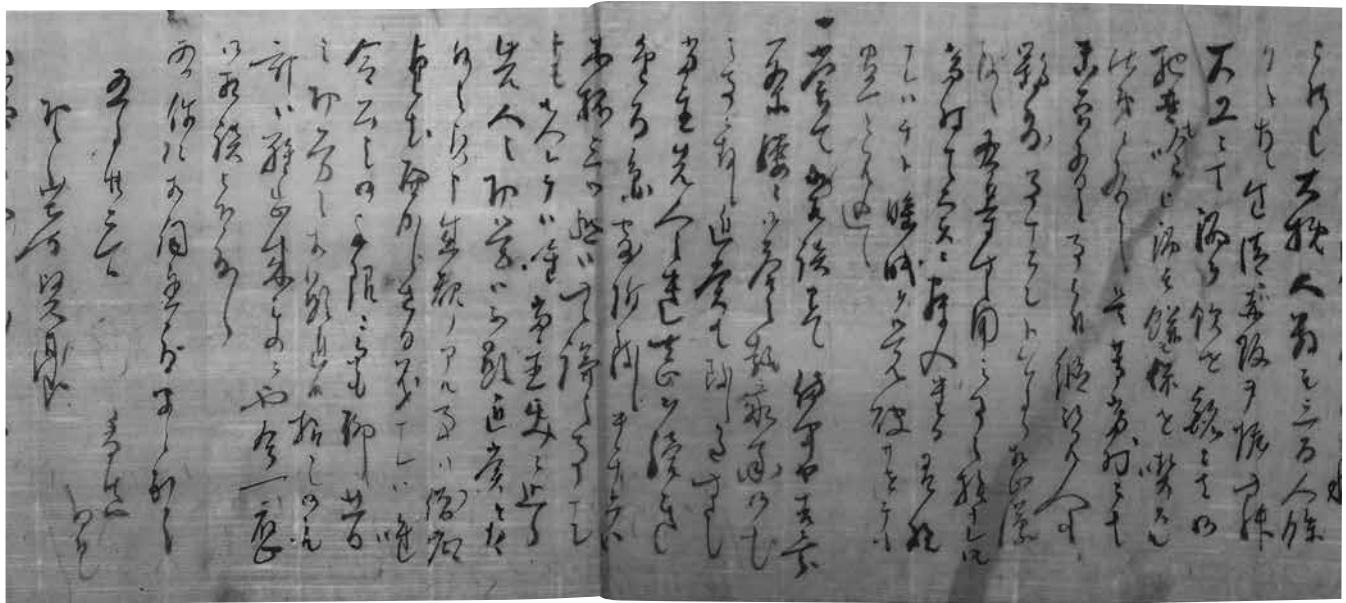
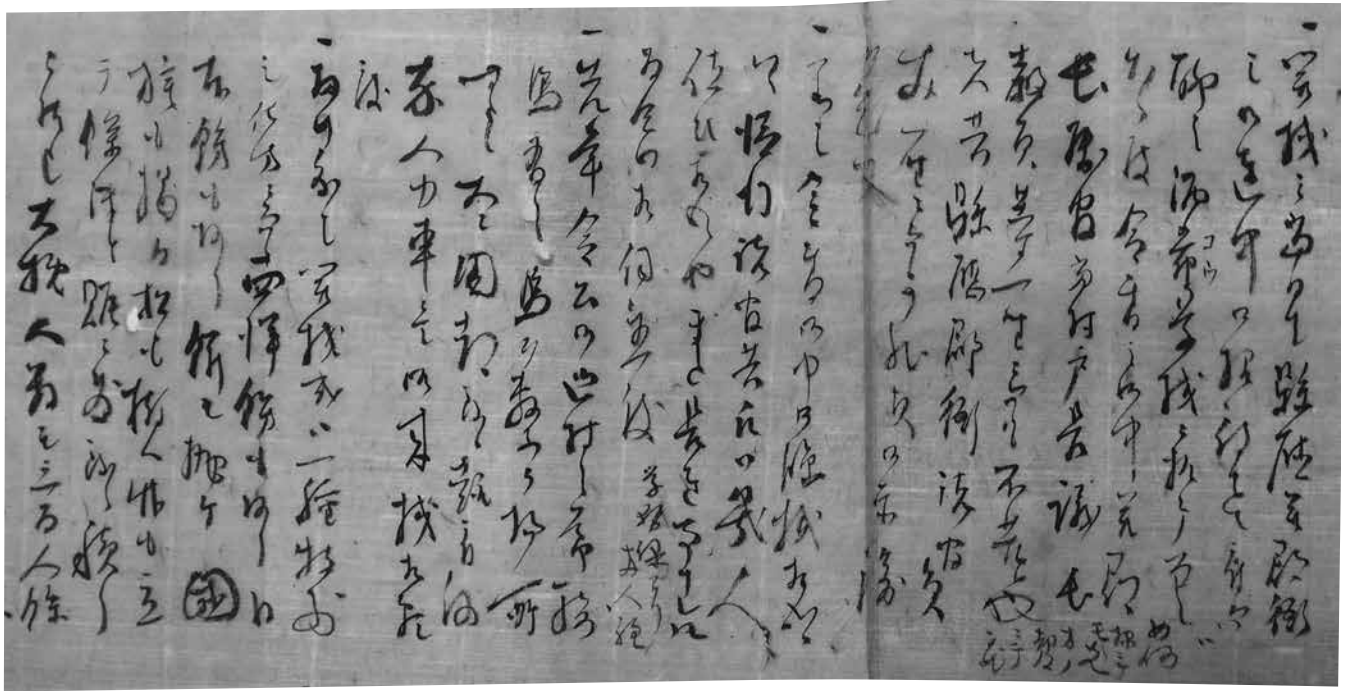


4 西薇山書幅 (明治35年(1902)☆)

西薇山(1843~1904、名は毅一、字は伯毅)は岡山藩士の霜山家に生まれ、大坂で後藤松陰らに学び、森田節齋門下の儒者西後村の養子となり西氏を称した。上海渡航以来(1869)、日清提携の重要性を唱え、また民権運動期には両備作三国親睦会を興して政府に国会開設を建白した(1881)。一方、閑谷学校の運営は廃藩置県(1871)によって不安定な状況に陥り、当初、西は学校督事として漢学から英仏学への転換を図ったが、士族らの強烈な反対に遭う。後に西は岡本魏・中川横太郎らと保學會を設けて閑谷齋の再興に尽くし(1881)、明治18年には閑谷に移住し、衆院議員を辞した晩年は閑谷齋における育英に専念した。娘艶子が日中貿易の開拓者として著名な白岩龍平の妻であることもよく知られている。展示品はこの年60歳を迎えた西が、閑谷で揮毫したもので、読書・詩作を楽しむ育英の日々を詠んでいる(M)。

(翻印)「雑窓讀史、時々豎髮裂眦、驢背尋詩、處々怡情通趣、千古之是非、激人之義氣、目前之光景、暢我樂機。庚子初秋於閑谷山中薇山録」

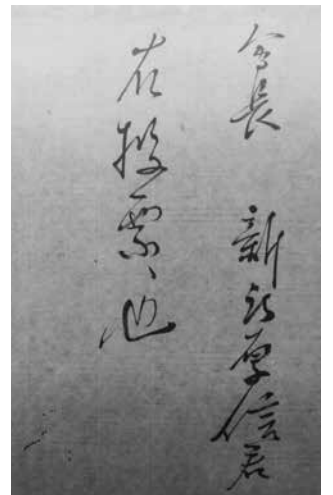
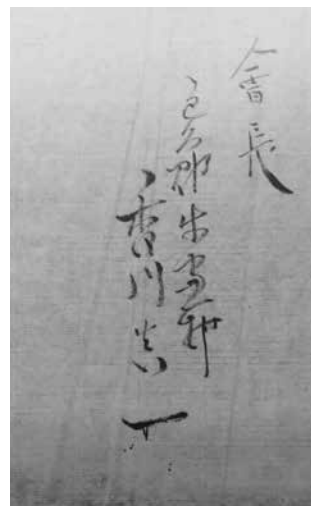
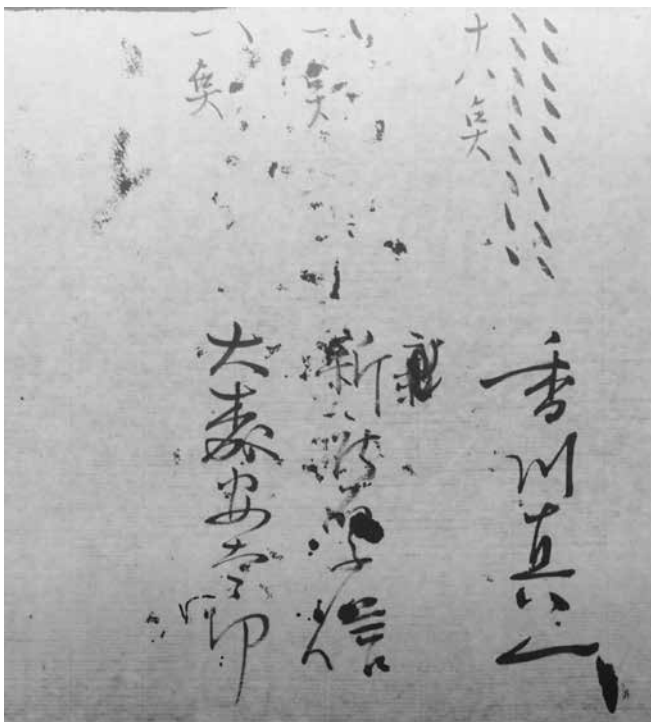
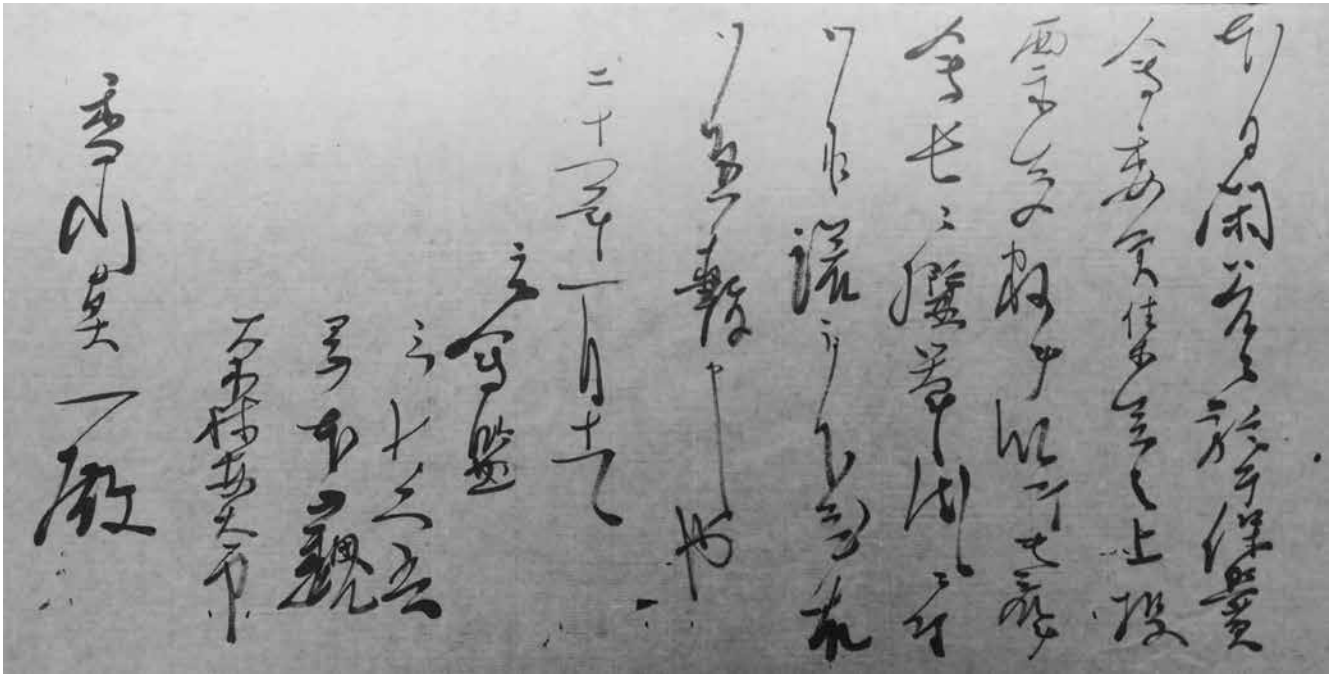




5 | 香川真一書簡 (野崎万三郎宛 明治10年代後半～20年頃 5月23日付) (SRF新取資料)

香川真一（1835～1920、初名英五郎）は岡山藩士の家に生まれ、江戸で蘭学・西洋砲術を学び、維新後、岩倉使節団に従って渡欧。帰国後は地方官を歴任し、大分県令を最後に、備前邑久郡牛窓に帰隠（1879）。以後は岡山の政官界・実業界において重きをなした。展示品は明治10年代後半～20年にかけての書簡で、地元牛窓における学校の開校式について報じており、香川が教育に熱心に取り組む、地域の発展に尽くしたことが分かる（M）。

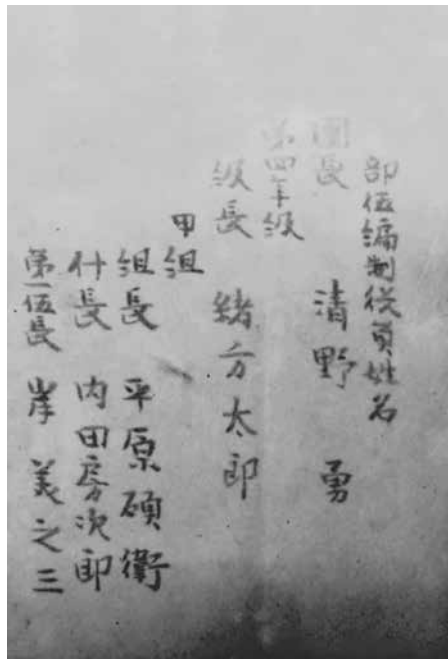
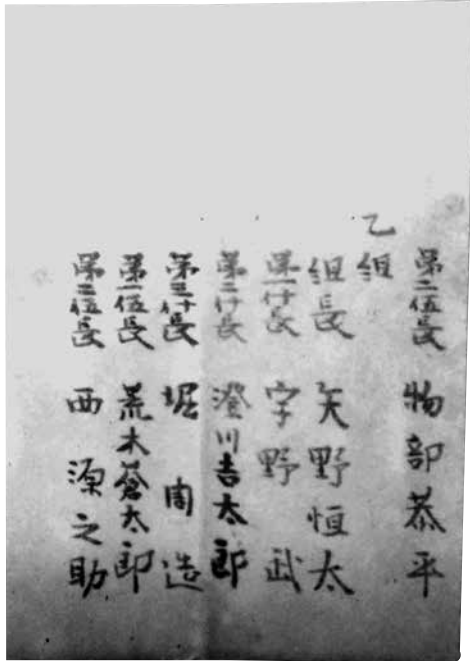
(翻印)「…扱此度之開校式ハ一種特別之仕方ニ而、西洋飾もあり日本飾もあり、餅も抛け国旗も掲げ、松も樹へ竹も立て、餘ほど賑々敷致候積リニ罷在候。大概人数モ三百人餘かと存候。生徒ニハ赤飯ヲ振舞、大工ニハ酒ヲ飲せ、銘々は御馳走も喰ヒ、酒モ餅モ併セ喫ル次第第二有之。是等当村ニハ未曾有之事ニ付、縦覧人も夥敷事ナラント今より想像致候。右等無用之事之様ナレトモ、当村は実ニ寝入たるにて、祝ナレハチト睡眠ヲ覚破サセテも宜と見込候。」



6 保覺会会長選挙得票資料(明治21年〈1888〉1月11日付)(SRF新収資料)

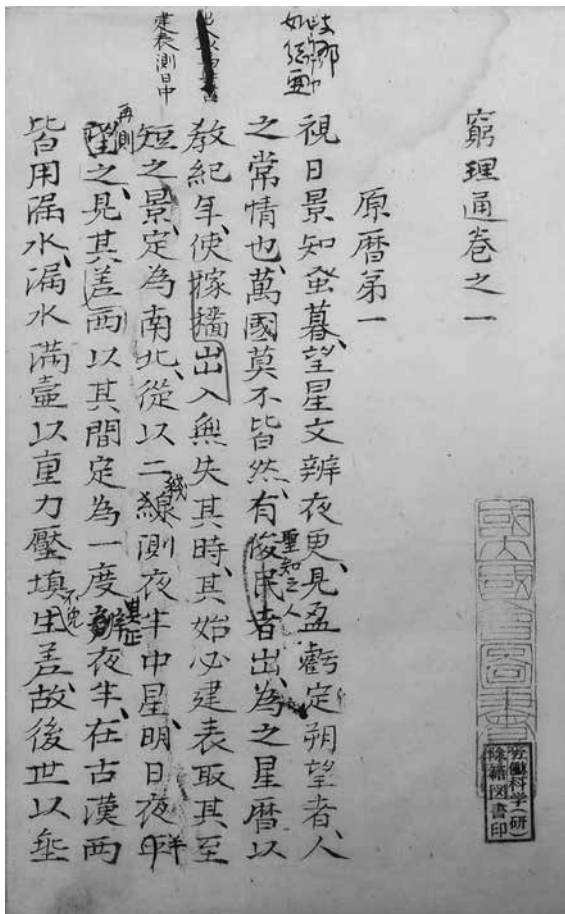
明治14年(1881)に発足した保覺会は、備前八郡の各郡長と謀って義捐金を募り、閑谷覺を再興(再々興)した。保覺会には会長と幹事が置かれ、また閑谷覺の覺長には西毅一が就任した。会長は委員の互選によって選出され、初期の委員としては西毅一・中川横太郎・岡本巍・谷川達海・小野楨一郎・中野寿吉・大森安太郎・新庄厚信・香川真一・草加廉男・万波忠治・森下景端・花房端連・三村久吾らがいた。展示品は明治21年(1888)1月11日選出時の投票用紙と投票結果、及び幹事連名による選挙結果通知である。20票中、香川真一が18票、新庄厚信と大森安太郎が各1票を獲得し、香川が会長に選出された。香川はその後もたびたび会長職を務めている(M)。

(翻印)「本日閑谷ニ於テ保覺會委員集会之上、投票多数ヲ以テ貴君ヲ會長ニ撰挙致候ニ付、御承諾被下度、右御通報申候也。
二十一年一月十一日 元會監 三村久吾 岡本巍 大森安太郎 香川真一殿」



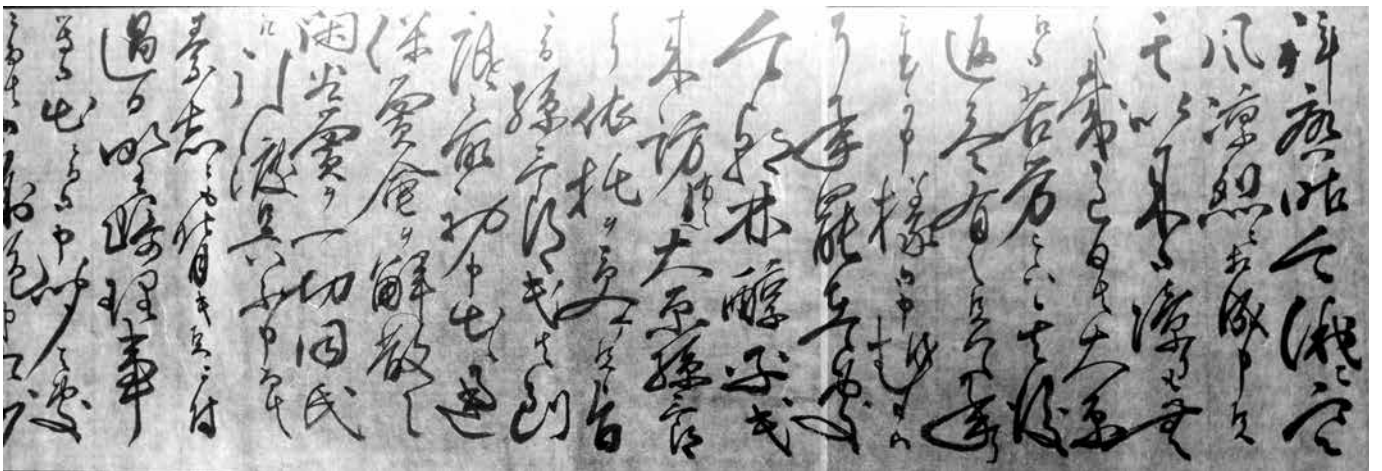
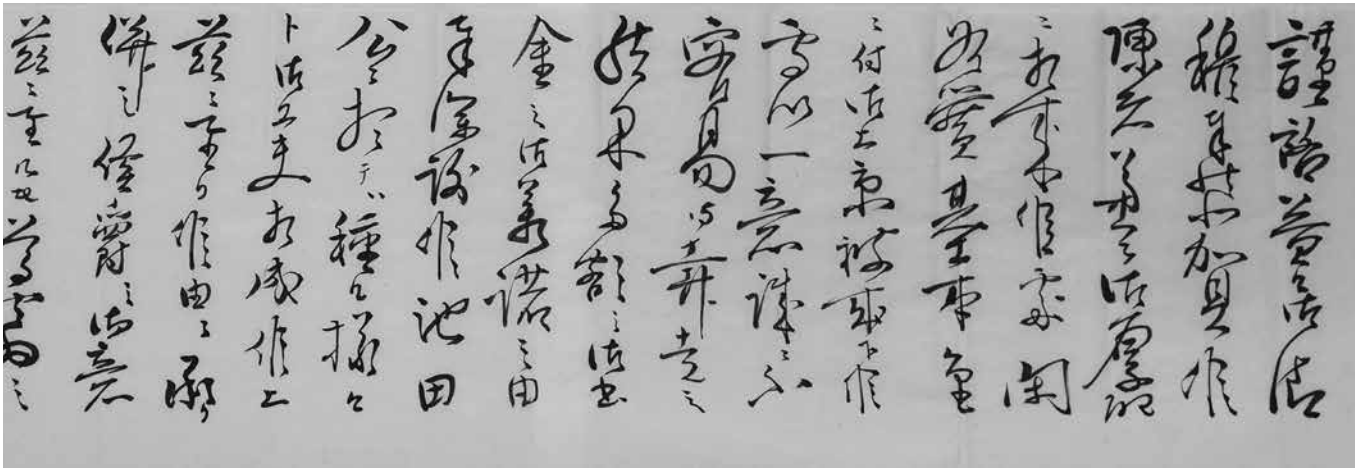
7 | 岡山県医学校生徒役員名簿 (明治21年 (1888)) (SRF新収資料)

『閑谷餐及門録』(1899刊)は、本編に閑谷餐に学んだ生徒を収録し、附録としてその前史に相当する池田学校(明治10年5月~12年11月)と原泉学舎(明治13年3月~17年6月)の生徒を収録している。これら過渡期の漢学塾には多様な生徒が学び、その後の進路もまた様々であった。展示品は原泉学舎もしくは閑谷餐から岡山県医学校に進学した学生から保餐会に贈られたと思われる岡山県医学校の生徒役員名簿。第4学年には矢野恒太(第一生命創設)の名が見え、ここに名は無いが岡山四聖人の一に数えられる石井十次も在学中である(1889中退)。明治21年(1888)に同校は第三高等中学校医学部に改組されているが、この年入学した1年生は卒業者が少ないことから、改組にともない何らかの軋轢があったことも推測される(M)。



8 | 難波抱節筆・帆足万里撰『窮理通』 8卷存4冊(闕卷3、6至8) (SRF新収資料)

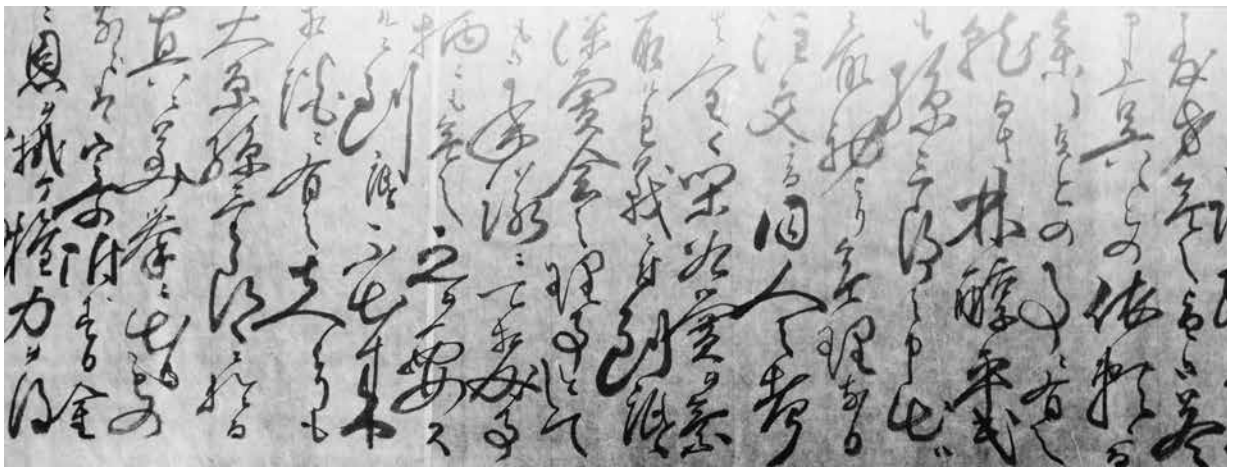
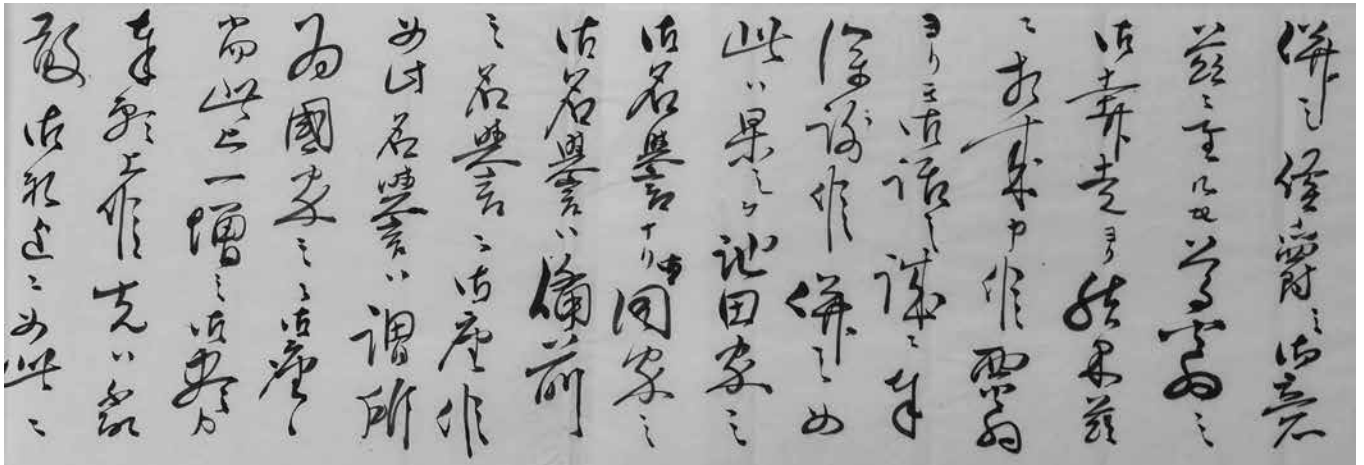
帆足万里(1778~1852、名は万里、字は鵬卿・文簡、愚亭と号す)は、豊後日出に生まれ、京坂に遊学して漢学を学び、日出藩校の教授となりまた私塾西庵精舎を開いた。さらに蘭学をおさめた。『窮理通』(1836成、1856刊)は自然科学書で、蘭語の原書をもとに、批判と独自の見解を記している。展示品の書写者難波抱節(1791~1859、通称は立愿、名は経恭、字は子敬)は備前に生まれ、京坂に遊学し、吉益南涯・賀川蘭斎・緒方洪庵らに学んだ漢蘭折衷医で、郷里備前金川に開業し、また私塾思誠堂を開いて医学・漢学を教授した。思誠堂は19世紀備前の私塾として特色ある存在である。万里との交流は、男経直(1818~1884、名は経直、東里と号す)が、万里のもとに遊学したことに始まり、万里も抱節のもとへ門人を送り出している(S)。



上段 9 | 万波忠治書簡(野崎万三郎宛 明治33年〈1900〉11月21日付) (SRF新収資料)

再興された閑谷黌には地元和気郡からの入学者が特に多く、1884～1902年までの入学生1841人中、和気郡出身は266人に上った。万波忠治(1849～1920)は和気郡吉永出身で、英保村長(1889～1899)、和気郡会議員(1900～)、県会議員(1911)などを歴任し、また三石耐火煉瓦の2代社長を務めた地元の有力者である。万波は保覺会委員と閑谷黌職員も務めていた。閑谷黌では、漢学を維持しつつ中学校令に配慮した教育課程を構築し、明治36年(1903)に私立中学校として認可されるに至った。展示品は、これに先立つ時期に閑谷黌関係者が学校組織確立のために尽力している様子を伝える書簡であり、東京における学校運営団体の基金募集には内務省官吏を経て岡山県の財務官吏を歴任した野崎万三郎(1839～1910、邑久郡西幸西出身)も関わり相応の成果があった。備前地域の基金には坂田警軒や林孚一らも協力した。閑谷黌存続は「池田家の名誉」であり「備前の名誉」であり、地元の悲願でもあった(M)。

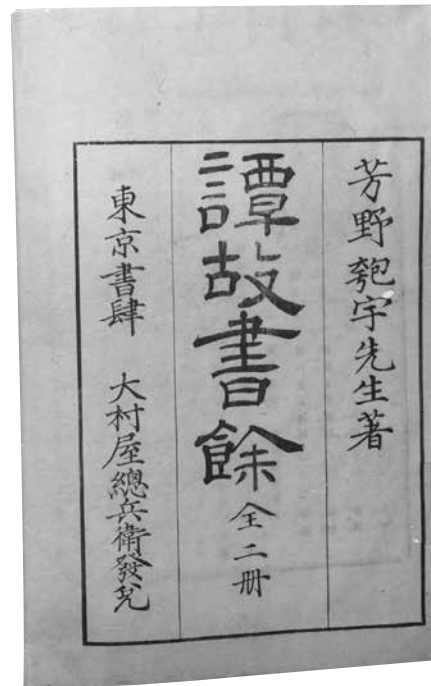
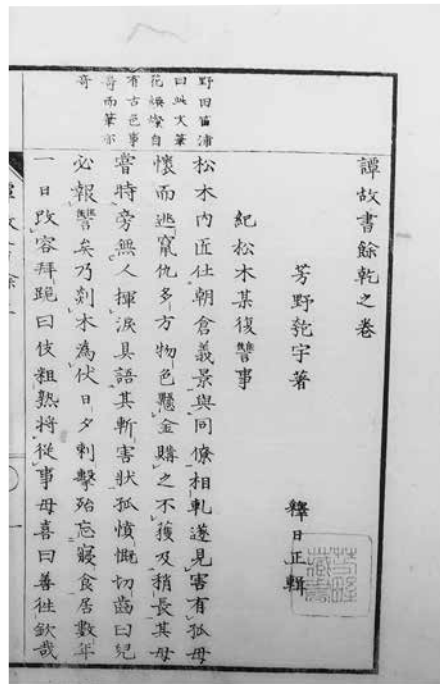
(翻印)「謹啓、益々御清穆奉恭賀候。陳者兼々御厚配ニ相成候處、閑谷黌基本金ニ付、御上京被成下候。専心一意誠ニ不容易御奔走之結果、多額之御出金之御承諾之由奉深謝候。池田公ニ於テハ種々様々ト御工夫相成候上、茲ニ至り候由ニ承り、併し候爵之御意茲ニ至ルモ尊翁之御奔走ヨリ結果茲ニ相成申候。西翁ヨリモ御話し、誠ニ奉深謝候。併し如此ハ池田家之御名誉ナリ、同家之御名誉ハ備前之名誉ニ御座候。如此名誉ハ所謂為國家之ニ御座候。尚此上一増之御尽力奉願上候。先ハ不取敢御礼迄ニ如此ニ御座候。…」



下段 10 | 岡本天岳書簡(野崎万三郎宛 明治33年(1900)12月9日付)(SRF新収資料)

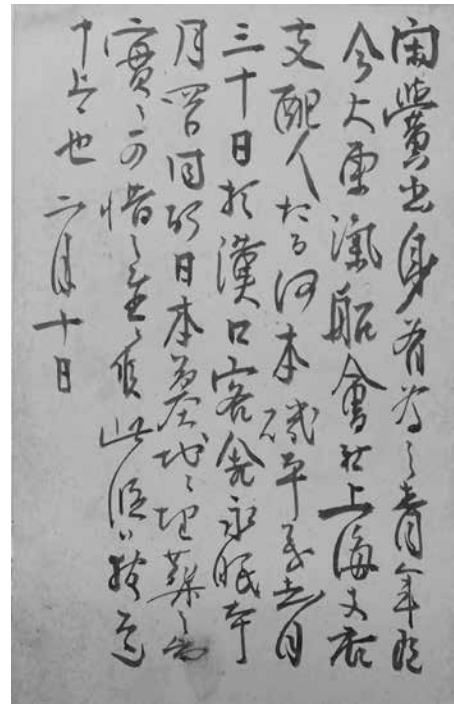
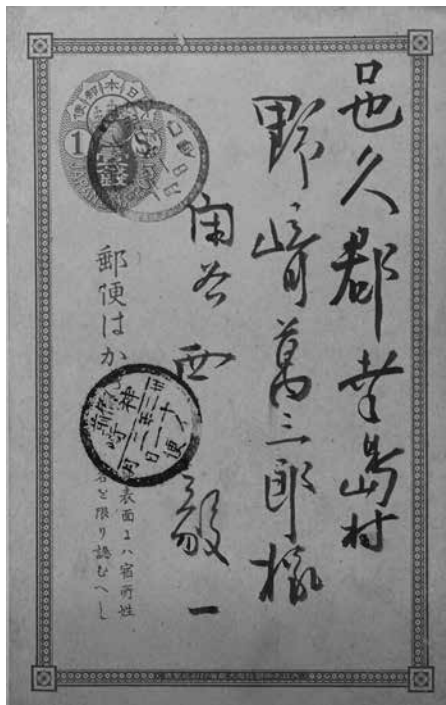
岡本天岳(1850～1920、名は巍)は明治5年の山田方谷招聘以来、閑谷学校の維持存続の中心人物の一人。方谷晩年の陽明学に傾倒し、三島中洲との間に論争も惹き起こしている。展示品は、かつて閑谷巒に学んだ倉敷の富豪大原孫三郎の保養会基金募集に関する動向を伝える書簡。大原は林醇平(孚一の三男)に意向を託し、寄附金を出す条件として関係者が到底承諾できない保養会解散・閑谷巒引渡しを要求し、交渉は決裂した。この時期、西巒長はたびたび卒倒し健康面に不安があり、閑谷はその維持存続にいくつもの問題を抱えていた(M)。

(翻印)「…今朝林醇平氏来訪有之、大原孫三郎氏より依托ヲ受ケ候旨ニ而、孫三郎氏は到底最初申出候通、保養會ヲ解散し閑谷巒ヲ一切同氏江引渡呉不申而は素志ニも背キ候ニ付、過日野崎理事等御出ニ而御申聞之處ニ而ハ御謝絶申上候外致方無之旨、御答申上呉候との依頼ニ而参り候との事ニ有之。就而は林醇平氏も孫三郎之申出ハ最初より無理なる注文ニ而、同人之考は全く閑谷巒ヲ乗取ル主義ニ付、到底保養會之理事としても御承諾ニ可相成事柄ニも無之、之ヲ要スルニ到底不出来相談ニ有之。夫よりも大原孫三郎ニ於而真ニ美挙ニ出るものならば寄附する金ニ恩ヲ掛ケ、権力ヲ得るとか、我物ニするとか之野心ナク、立派ニ保養會江寄付金ヲ致し、出シタル金ニ目ヲ懸ケザル様ニ致せば、財産家として立派なる挙と申すべし。条件とか何トカヲ持出して己之自由ニせん為メニ金ヲ出すと云ふは、大原之為メニも面白からず、又保養會ニも夫ニ應ぜらるべき事ニ無之云々申居候。依而之ヲ要するニ、孫三郎分断リヲ林氏依頼ヲ受ケ今朝弊屋江参り候次第ニ有之。然ル處江、幸ヒ西氏も来り合セ、一兩日前、大原孝四郎氏閑谷江参り同様断り申出候由。尤孝四郎氏ハ孫三郎分之申出ハ猶豫致呉候様申出候趣ニ而、何ニカ別ニ考有之様子ニ有之候よし。委細ハ西氏よりも御通知可申上候得共、小生よりも御通知申上置呉候との事ニ有之候ニ付、荒増御報申上置候。…」



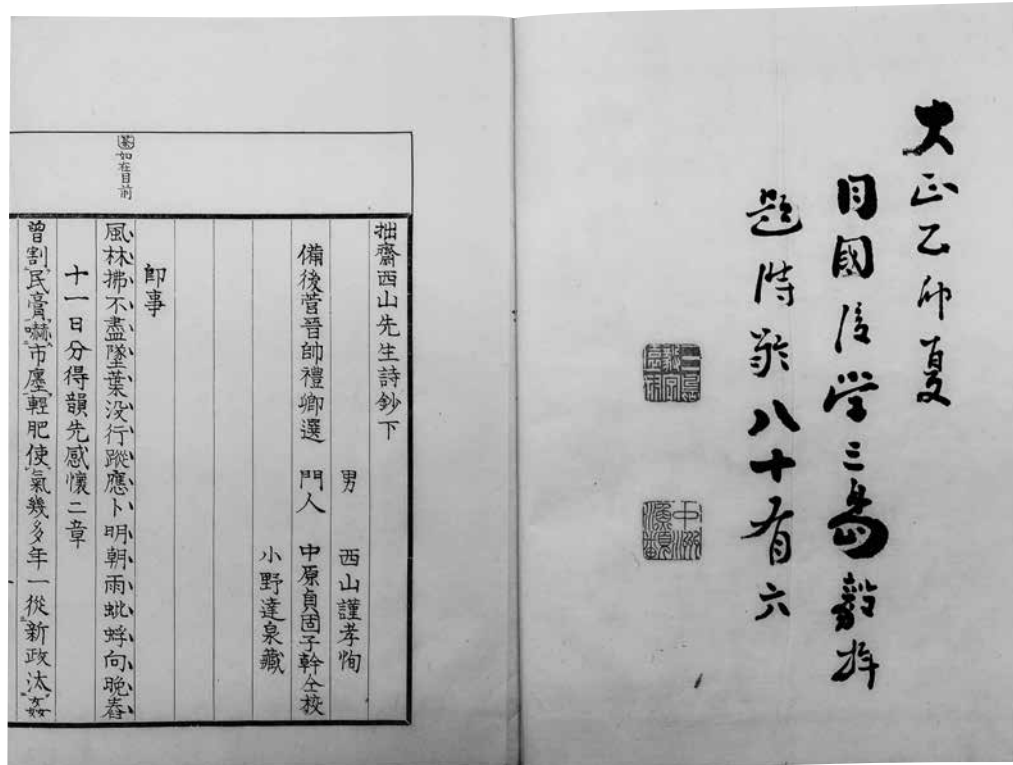
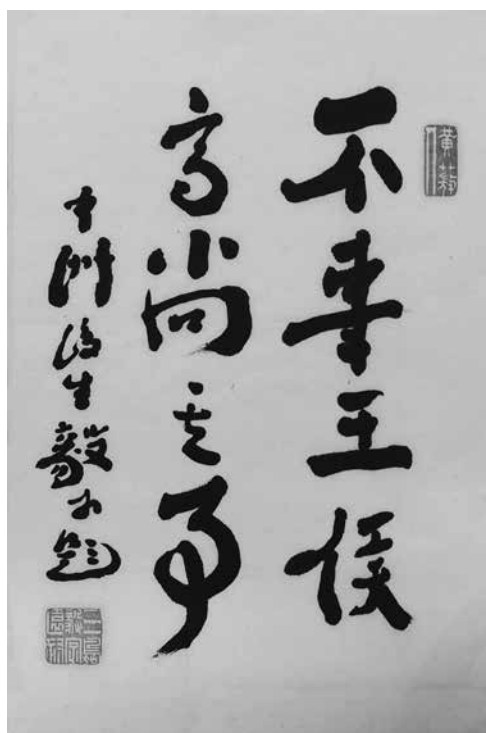
15 日正編・芳野金陵撰『譚故書餘』2巻2冊 (1876年東京宇田總兵衛刊) (芳343)

芳野金陵 (1803～1878) は、下総出身の儒者で、亀田綾瀬に学び、駿河田中藩儒を経て、安井息軒・塩谷宕陰とともに昌平坂学問所付の御儒者に登庸された (1863)。「譚故書餘」は、金陵の文から伝記を中心に編集したもので、岡松麴谷と編者日正の序を付す。日正 (1829～1908、幼名は亀次郎、院号は宣明院) は、備前国津高郡九谷村に生まれた日蓮宗不受不施派の僧。明治9年 (1876)、教部省の達しにより、江戸幕府のもとで禁制となっていた不受不施派の公認を得ることに成功し、備前金川の医家難波抱節 (前掲8参照) の邸宅跡に妙覚寺を創建し本山とし、今に続く (S)。



16 河本磯平死亡通知 (野崎万三郎宛 西穀一ハガキ 明治32年 (1899) 2月10日付) (SRF新収資料)

河本磯平 (号黙堂) は慶応4年 (1868) 1月15日、美作国大庭郡河内村に生まれた。閑谷巒で学んだ後、明治23年 (1890) に白岩龍平とともに上海に設立された日清貿易研究所に進学した。同26年 (1893) 同研究所を卒業後、中国各地を調査し、日清戦争に際しては通訳官として従軍した。同29年 (1896)、白岩が設立した大東新利洋行に入社し、上海～蘇州・杭州間の水運事業に従事した。このほか、『亞東時報』の刊行にも尽力した。本書簡には記されていないが、死因は自殺であった (K)。



17 | 西山拙齋『拙齋西山先生詩鈔』写本（大正4年〈1915〉三島中洲題字・柚木玉邨題画）（SRF新収資料）

板倉宗家（譜代5万石）が伊勢亀山から備中松山に移封となったのは延享元年（1744）のことで、歴代藩主は早世する者が多く、財政は困窮し藩政は振るわなかった。しかし小藩の林立する備中において備中松山板倉家の存在は小さくない。移封後すぐに創立された藩校（1746）も低調であったが、寛政中に藩士野村竹軒（1739～1818、名は必明・利器、通称治右衛門、岡龍洲門）が藩校の整備に当たり、野村の伯父蘆田北溟（1722～1799、名は恒、通称利兵衛）を教授に据え、野村自身が助教となり、藩校は藩主板倉勝政によって「有終館」と命名された。文化8年（1811）頃には、令名のあった備中鴨方の儒者西山拙齋（1735～1799、岡白駒・那波魯堂門）の二男復軒を招聘して有終館に経書を講義させており、藩学振興のための人材獲得に心を砕いていたことが分かる。

展示品は文政11年（1828）刊本からの精写本で、各巻頭に86歳の三島中洲が「同国後学」と署して題字を揮毫しているのが珍しい（M）。

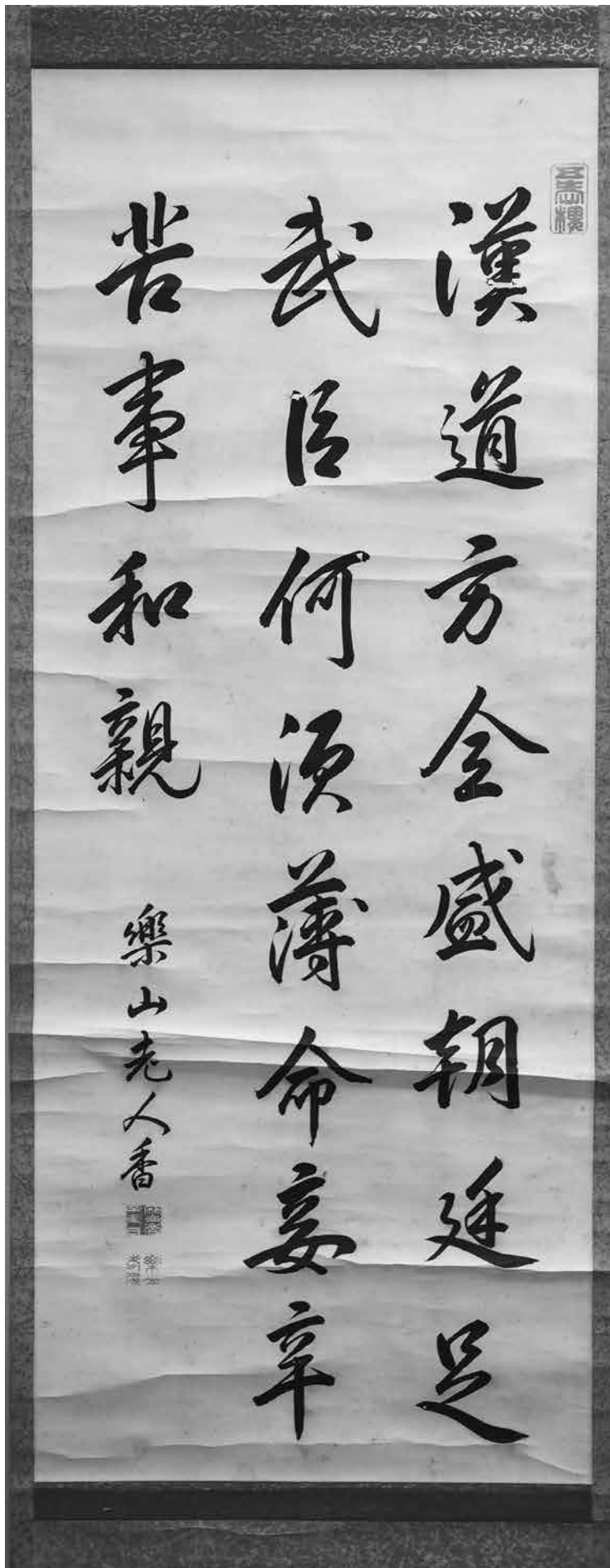
18

奥田楽山書幅（掛軸卷子0313）

奥田楽山（1777～1860、名は盛香、別号蕉窓・莫過詩屋・五愛楼）は、備中松山藩士の家に生まれ、大坂の中井履軒に儒学を、福山の菅茶山に漢詩を学び、藩校有終館の学頭等を歴任し、詩に堪能な風流人として知られた。山田方谷より28歳年長で、備中松山藩学の歴史の中では、野村竹軒と山田方谷の間をつなぐ存在と言える。文政8年（1825）に藩領の農商に対する訓諭・奨学の意味から、好学の評判が高かった21歳の山田方谷を召出して二人扶持を支給した時にも、奥田が関与している。世子板倉勝静が藩主に代って領国に還った時、奥田と山田は隔日で講義を行った（1844～45）。幕末の風雲急を告げるなか奥田は引退し、晩年はめったに人に会わず、作詩に専念した。

展示品は、唐・東方虬の五言絶句「昭君怨」を揮毫したもので、関防印「五愛楼」は退隠後に城下の郊外に営んだ別邸の名であることから、晩年の作と考えられる。なお「五愛」とは花風月雪と山を指す。山田方谷と三島中洲がそれぞれ七言律詩「五愛楼上追懷樂山奥田先生」、七言律詩「五愛楼追憶奥田先生」を残している（M）。

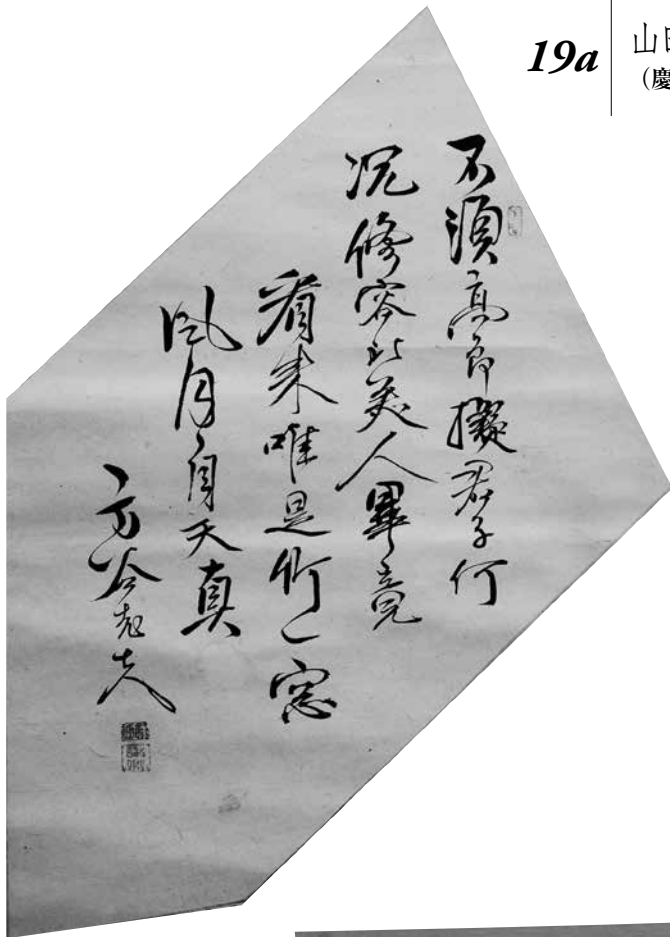
（翻印）「漢道方全盛 朝廷足武臣 何須薄命妾 辛苦事和親 樂山老人書」



19a

山田方谷書

(慶應元年(1865)頃「儒者文人寄合書」のうち)(掛軸卷子0281)

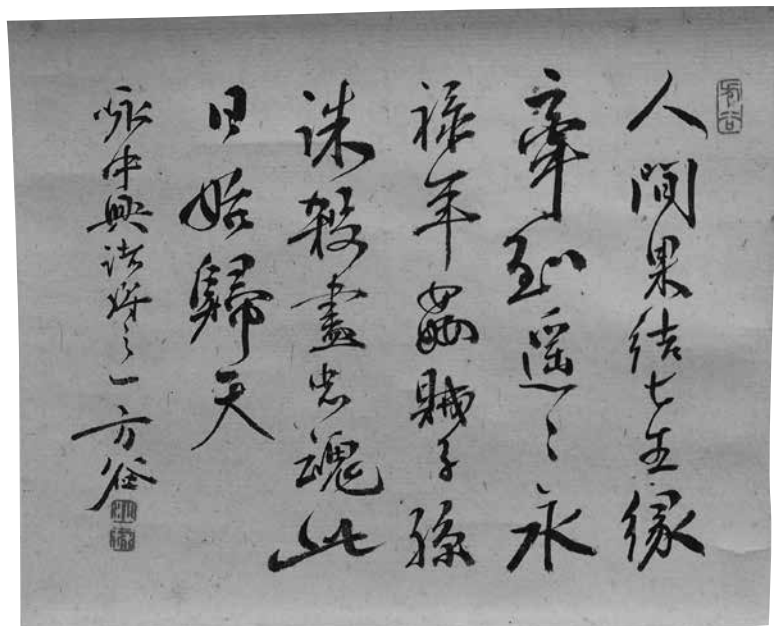


備中松山藩領の阿賀郡西方村の豪農層の家に生まれた山田方谷(1805～1877、名は球、字は琳卿、通称は安五郎)は近隣にその神童ぶりを知られ、新見藩儒丸川松隠に学び、21歳で好学を賞されて備中松山藩から2人扶持を給された。文政・天保期に方谷は遊学し、京都の寺島白鹿、次いで江戸の佐藤一斎・松崎謙堂に学び、有終館学頭となった(1836)。

方谷の七言絶句「詠竹」は、『山田方谷全集』によれば、天保13年(1842)、方谷38歳の年の所詠であるが、全集所収作は第四句を「一庭寒緑自天真」に作り、展示品とは異同がある。

展示品は、仲田某の需めに応じて、儒者・文人が書画を寄せ書きした一幅で、幕末西国儒者のネットワークを感じさせる。年次の記載は元治元年から明治元年(1864～68)へと上行しているので、方谷の揮毫時期も上下の書画の間、すなわち阪谷朗廬(乙丑春1865)より後、門田朴斎(丙寅正月1866)より前と推定される(M)。

(翻印)「不須高節擬君子 何況修容比美人 畢竟看来唯是竹 一窓風月自天真 方谷老夫」



20a | 山田方谷書 七言絶句「咏中興諸将之一」(掛軸卷子0212)

山田方谷(1805～1877)は楠公討死時の「七生報国」について、楠公は本当に生まれ変わったに違いないと考え、建武～永祿年間の歴史に照らして七人を選びその伝記を書いた(「楠公七生伝序」)。展示品は、嘉永5年(1852)5月江戸から帰藩の途次、湊川を過ぎた時の所詠を揮毫したもので、永祿年中の転生は織田信長を指すという。方谷の楠公論は欧米帝国主義の脅威に曝された幕末日本は楠公当時より危ういという現状認識に立つ発言であり、衰運を一世に挽回することはできないが、百世の挽回を期して今から事業に着手しなければならないと説く。この方谷の特色ある歴史観は養孫の山田濟斎にも継承され、敗戦時に将来の大回転を期するには今こそ楠公精神を体し奮励努力して「道義立国」を目指せと説いている(M)。

(翻印)「人間果結七生縁 牽到遙々永祿年 姦賊子孫誅殺盡 忠魂此日始歸天」



21 | 山田濟齋「詩文稿」(山田氏寄贈資料)

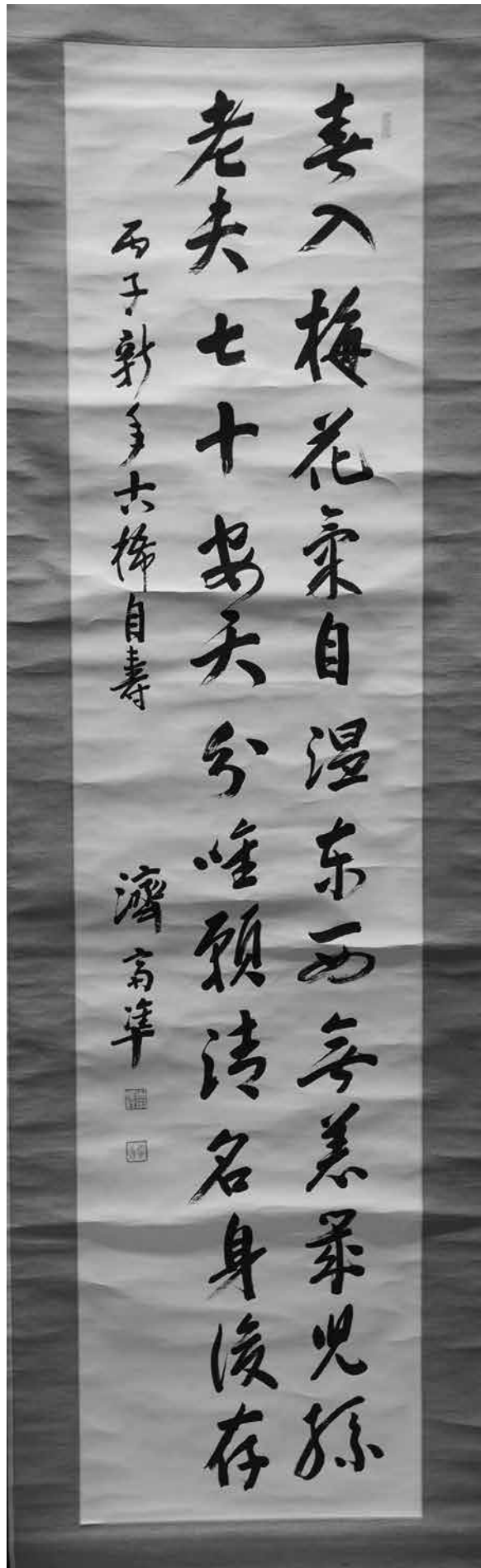
山田濟齋(1867～1952、本姓木村氏、名は準、字は士表)は、備中松山藩甲賀町(現岡山県高梁市)に木村豊の三男として生まれ、元藩校の漢学塾有終館を経て、明治16年(1883)上京して二松學舎に入学。その翌年、山田方谷の養嗣子耕造(知足齋)の長女春野と結婚し、山田家の家督を継承した。二松學舎に次いで、東京大学古典講習科漢書課に学び、卒業後は城北中学講師、陸軍參謀本部編集補、熊本・第五高等学校教授、鹿兒島・第七高等学校造士館教授などを歴任し、のち、二松學舎専門学校校長となる。展示品は、明治期20年代から大正、昭和にいたる詩文稿で、初期の未綴じの原稿約50篇と「麿城詩稿」「濟齋詩集」「濟齋詩稿」として仮綴じされた稿本約25点からなる。未綴じの原稿は「行餘文社」「鴉々社」などの用箋が使用され、池田胤(蘆洲)、加藤信太郎(復齋)、久保雅友(檜谷)、土屋弘(鳳洲)、那智佐伝(惇齋)、細田謙蔵(劍堂)、本城賈(問亭)、三島中洲など複数者の添削が、緑筆は久保雅友、紫筆は加藤信太郎、というように墨色別に入っている(S)。

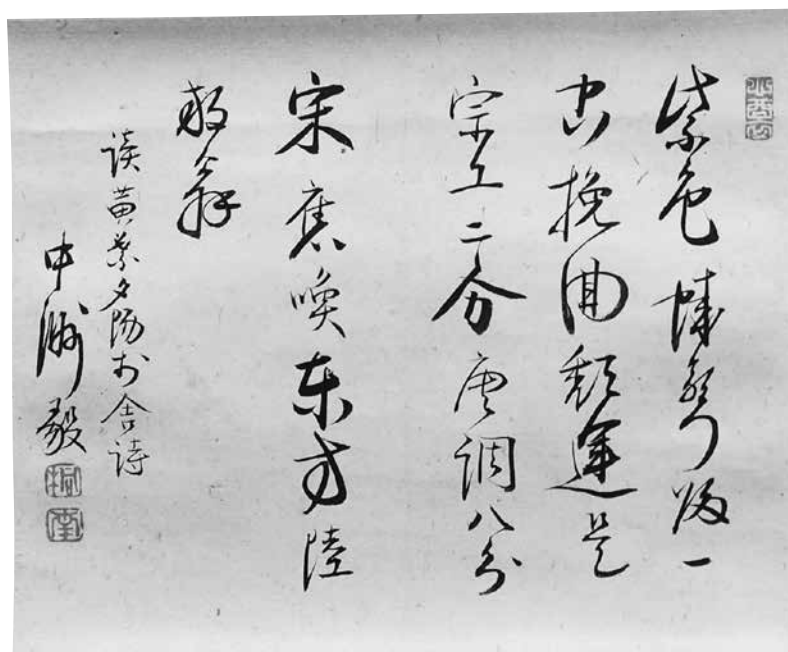
山田濟齋は鹿児島第七高等学校教授を25年間勤め、60歳定年を迎えて同校嘱託講師となった。一方、東京の二松學舎では学祖三島中洲歿（1919）、後継者三島雷堂歿（1924）の後、存続発展を計るために洪沢栄一の指揮の下で大正末期から専門学校開設の動きがあり、初めその校長には岡山出身の二松學舎卒業生で東京大学古典講習科（漢書課後期）に学び東京高等師範学校教授を退官した児島献吉郎（1866～1931）が擬せられたが、児島が京城帝国大学文科大学教授に任官して朝鮮に赴任することになったため、新たに校長を探すこととなり、同郷・同学の山田濟齋が昭和2年（1927）に東京し、翌年4月開校の二松學舎専門学校の初代校長に就任した。

山田濟齋は校長職を15年勤めて、戦況悪化する同18年、77歳で郷里に退隠し、以後は宿願であった『山田方谷全集』の編纂に全精力を傾けた。『山田方谷全集』は戦中戦後の物資不足に阻まれながらも、3冊2400頁の大作として同26年（1951）に刊行された。第1部―年譜・漢詩文、第2部―著書、第3部―教学・事業、第4部―書簡、第5部―附録からなる。

展示品は、同11年（1936）、古稀を迎えた年の自寿の七言絶句。山田濟齋は妻春野（方谷の養子である山田知足齋の女）との間に琅・璋・瑛・琢らを儲け、多くの子孫に恵まれた（M）。

（翻印）「春人梅花氣自温 東西無恙幾兒孫 老父七十安天分 唯願清名身後存 丙子新年古稀自寿 濟齋準」

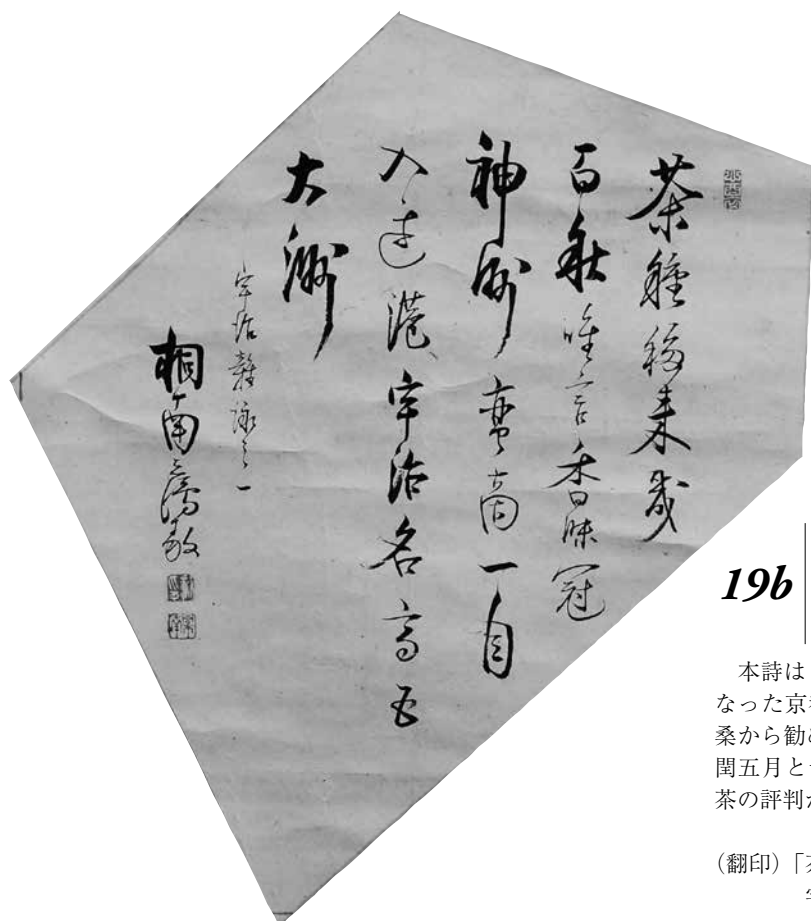




206 | 三島中洲書「読黄葉夕陽村舎詩」(掛軸卷子0212)

『中洲詩存』によれば、本詩は嘉永5年(1852)中洲23歳、現存する中洲詩中の最早期作で、「読近人詩次梅山川北先輩韵 原十音」として四首収録されているうちの一首である。展示品によってこれが「黄葉夕陽村舎詩」、すなわち福山藩領神辺の菅茶山(1748~1827)の詩を詠じたものであったことが分かる。菅茶山は江戸後期から明治初期には全国にその名を知らないものはないほどの詩人であり、その詩は人々に愛唱された。菅茶山の詩に対する中洲の評価として興味深い(M)。

(翻印)「紫色蛙声帰一空 挽回頼運是宗工 二分唐調八分宋 應喚東方陸放翁 讀黄葉夕陽村舎詩 中洲毅」



196 | 三島中洲書「宇治雜詠」
(慶應元年(1865)頃「儒者文人寄合書」のうち)
(掛軸卷子0281)

本詩は『中洲詩存』『中洲詩稿』等に未収。幕末政治の表舞台となった京都に滞在中の所詠であろう。慶應元年、板倉勝静は一会桑から勤められて老中に再任する。中洲はその使者として奔走し、閏五月と十月に入京している。詩は、日本が開国した現在、宇治茶の評判が世界中で名高くなっていると詠じている(M)。

(翻印)「茶種移来幾百秋 唯言香味冠神州 蛮商一自入邊港 宇治名高五大洲 宇治雜詠之一 桐南三嶋毅」

以日ハ初稿之返原名分種送候事
 傍明初又赴葉山王事モ早下
 下留可也矣
 至日而皇亦一律次韻
 水繞山圍別有天此中寄
 跡斷塵緣俱忘為客况
 歎老不覺辭家已隔年
 迎送門前絕車馬唱酬筆
 下走雲煙明朝同上東
 歸路何處旗亭掉酒靴
 御一笑
 七日 剛
 中洲宛
 此日余既失望而還到新橋下汽車則偶然与
 翁江相遇把手一笑平日都下頻煩來往不足為奇
 客中邂逅甚有情新橋尚是客途耳
 中洲毅

明治廿九年早春余避寒
 大磯川田翁江自客冬扈從
 皇太子在葉山余將以六
 日訪翁江先寄詩翁江
 回報曰吾亦將以六日將
 京散辭余失望而歸京避
 逅于新橋其翌走价次
 前日所寄詩韻見示余乃
 加評欲還之則翁江已赴葉
 山既而數日翁江宿痾俄
 發歸京未出一月而溘逝
 于嗟悲哉余與翁江締
 交殆五十年文書往來無
 虛日而此詩為寄余絕筆
 豈可不愛藏哉因記其由
 三島毅

26 | 川田甕江書簡(三島中洲宛 明治29年<1896>1月7日付)(掛軸卷子0117)

川田甕江(1830~1896、名は剛、字は毅卿)は三島中洲にとって同年・同郷・同学の50年来の親友であり、中洲は主に備中松山で藩政に参画し、早くから江戸に遊学して知己の多かった川田は主に江戸藩邸で活躍した。新政府に出仕した川田は修史事業に従事したが、重野安繹と対立の末、修史館一等編集を辞して宮内省に転出した(1884四等出仕)。明治26年(1893)9月には東宮御用掛を拝し、同28年8月より病み、翌年2月1日に67歳で歿した。展示資料は、中洲が受け取った川田の最後の書簡であり、中洲は多年交流の記念として識語を添えてこれを愛蔵した(M)。

(翻印)「昨日ハ新橋にて邂逅、忽分袖、遺憾千萬。僕明朝又赴葉山、王事モロキコト無シト謂ツ可シ矣。過日御垂示ノ一律次韻。水繞山圍別有天 此中寄跡斷塵緣 俱忘為客况歎老 不覺辭家已隔年 迎送門前絕車馬 唱酬筆下走雲煙 明朝同上東歸路 何處旗亭掉酒靴 御一笑。七日 剛 中洲大兄(此日余既失望而還、到新橋下汽車、則偶然与翁江相遇、把手一笑、果如詩中所言。平日都下頻煩來往不足為奇、客中邂逅甚有情、新橋尚是客途耳。中洲毅)」

「明治廿九年早春余避寒大磯、川田翁江自客冬扈從皇太子在葉山。余將以六日訪翁江、先寄詩。翁江回報曰、吾亦將六日歸京散辭。余失望而歸京、邂逅于新橋。其翌走价、次前日所寄詩韻見示。余乃加評欲還之、則翁江已赴葉山。既而數日翁江宿痾俄發歸京、未出一月而溘逝、于嗟悲哉。余與翁江締交殆五十年、文書往來無虛日。而此詩為寄余絕筆、豈可不愛藏哉。因記其由。三島毅」

亡友林抑齋墓碣銘

林抑齋勤勞國事遂疾而死去友人三鳴毅矣曰嗚呼抑齋愛國如家思君如親忠誠懇篤出乎天性而余實同出處與和其事則墓銘之責患得而不任焉初我庫山老公更張廢政尤急人才儲英邇後拔茹彙進而抑齋擢於封內高晉余從封外未就聘同志諸友一時盡著共國報効文中公出任暮老會撰表勅下公勸將軍遵奉余與抑齋諸友百方同旋輔之纂議回循事不俄行公遂還職於是余為度支抑齋副之又總撫育局專注意富強庶應中兼府再起公公固辭不可遂復職而洋夷益猖板內訂競起事既不可奈何余與抑齋諸友輔老臣留守內修武備外務隣好日夜拮据僅誌保封域於干戈騷擾之間而幕減益不振終有戊辰上國之變公從將軍東遜天討之兵既臨封疆諸臣屏居請罪余與抑齋諸友又鞠躬哀訴不幸公與世子陷賊中流離東陳抑齋諸友乃變形潛行圖報之而余則在內調送旅資往復文書具知其跋涉艱苦之狀既而世子自奧公自輟夷先後歸順朝廷乃命今公承先祀而老公與世子猶禁錮諸友私情不能無憾抑齋遂憂悶癸疾今公賜物慰問尋賜金若干賞其勤勞於是抑齋與余同致仕而其疾如故沈綿年餘終不起後不一年世子與老公先後蒙赦諸友私情惻然而抑齋則不及見之嗚呼可惜哉抑齋諱保字定卿姓林稱富太郎抑齋其稱後更雨村備中玉嶋邑人考諱貫通妹尾氏冒林氏配以其女即妣也夫妻龜龜服高大起產抑齋幼穎悟受學於庵里橫溝氏旁演劍及打拳夙夜研精皆有造詣然不懈高華家道益感弱冠換為邑吏每來治下訪方谷山田翁請益余時在門而年少未及交其後藩褒其有學行能事親特許佩刀參政二年賜二口糧進鄉士格命巡封內說諭辨明聞者多感化五年賜八口糧班中小姓為藩學助教翌春移住松山余以其夏來仕是為締交之始居一年兼產物方丈久中再後江戶元治元年賜祿五十石遷度支副官無幾兼隣好方又轉撫育總裁兼市尹明治三年致仕四年三月十六日卒距生文化癸酉年五十有九歸葬其鄉竹浦先人墓側佛謚曰忠貞院純誠篤敬居士非溢美也配種野氏生男女各三第二女適前田則忠第三男親興家祿餘先七抑齋為人端直而溫恭多才藝博涉書史善文詩工筆札其接人談笑和夷聞一善稱揚不容口至忠孝義烈事則拍案激賞感泣淋漓未嘗委人手居喪哀毀其事父母盡孝父母老病各數年晝夜侍養藥膳竭未嘗委人手居喪哀毀過人不少酒肉者並期年嗚呼抑齋事君之忠一本於事親之孝者於是可見而老公亦可謂能求忠臣於孝子門矣銘曰

秘孝事君 忠孝有本 以忠顯親 孝子無限
於戲若人 忠孝兩盡 立石勒文 臣子標準

三島毅撰

27 | 三島中洲撰「亡友林抑齋墓碣銘」拓本 (掛軸卷子0174)

林抑齋 (1813 ~ 1871、名は保、通称は富太郎、字は定卿、別号に雨村) は、備中国玉島の商家に生まれ、のちに備中松山藩士となった。山田方谷に学び、のちに藩校有終館の会頭となっている。三男の林親興は二松學舎に学び、のちに上房中学教師、文部省の役人となった。三島中洲は「林抑齋勤勞国事、遂疾而死」と起筆して、幕末維新期にともに藩政・国政のために粉骨碎身したことを縷述し、戊辰戦争によって各地に流寓した板倉勝静・勝弼父子を奪還するために、林らが「変形潜行」したこと、その後藩主父子が禁錮処分を受けたことを憂悶するなか発病したと述べ、藩主父子の特赦を見ずに林がなくなったことを惜んでいる。本碑は生地玉島の竹浦に建立するほか、『事実文編』74 および『明治詩文』に翻刻がある。

なお、林が自ら称した抑齋の号について、山田方谷は「抑齋説」を作った。それによれば、林は「性抗直不屈、而孝于其親」であり、その抗直な性格は抑制し難いものであるが、親孝行の心を推し及ぼして身を修め物事に接するように努めよと戒めた (K)。

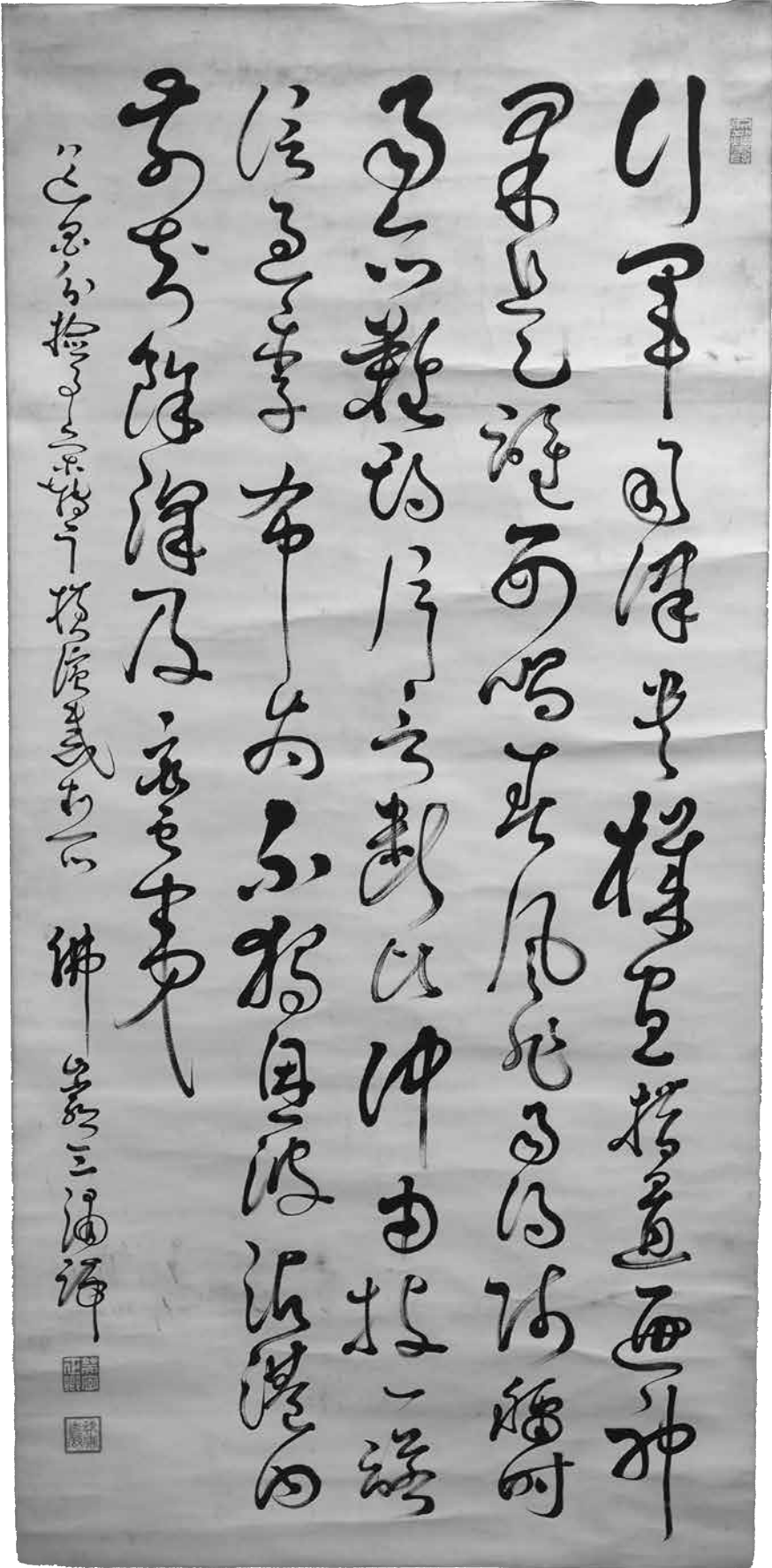
28

三浦佛巖書幅(掛軸卷子0111)

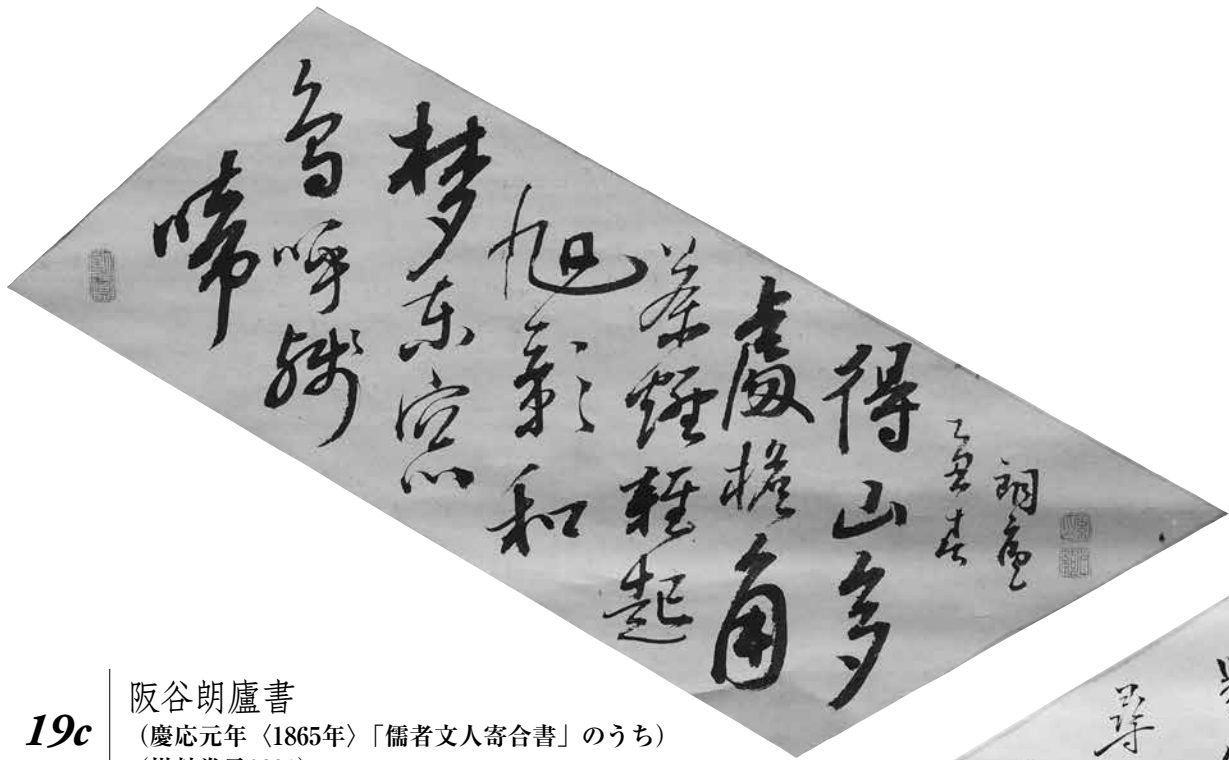
三浦佛巖(1829~1910、名は義端、字は正卿、通称は泰一郎)は備中松山藩士の家に生まれ、藩儒山田方谷に学び、安政年間に藩校有終館の学頭となった。方谷門の俊秀は、その多くが江戸等への遊学経験を有するが、三浦には遊学の経験がない。明治2年(1869)に帰農、同5年(1872)に小田県庁に奉職し、同15年(1882)岩手県師範学校教諭となり、帰郷して家塾に漢学を教授した。一時、二松學舎でも教鞭を執った。

本書幅は、国分三亥(1864~1962、号漸庵)が岡山裁判所から横浜裁判所の検事に栄転した時に、三浦から贈られたものであり、書幅の卷止めに国分が「此幅佛巖三浦義端先生在岡山送余赴横浜詩書也。先生曾教二松學舎。昭和十二年十月十日奉二松學舎六十周年記念式、裝潢以寄贈為記念。国分三亥」と書付けている。三亥は、旧松山藩士で板倉家の家令も務めた国分胤之(1837~1928)の長男で、二松學舎を経て司法省法学校に進み、各地の検事や朝鮮総督府の検事総長・法務局長を歴任した人物である。父胤之は『魚水実録』を編刊して備中松山藩の幕末維新資料を後世に伝えしめ、三亥は漢詩を能くして二松學舎舎長にも就任している(M)。

(翻印)「行軍南津貴機宜 措置通神果是誰 刑唱春風非易得 陟称時雨亦難期 片言断比冲由技 一諾信過李布為 不獨恩波沾港内 前知餘澤及蛮夷 送国分検事栄転于横濱裁判所 佛巖三浦端」



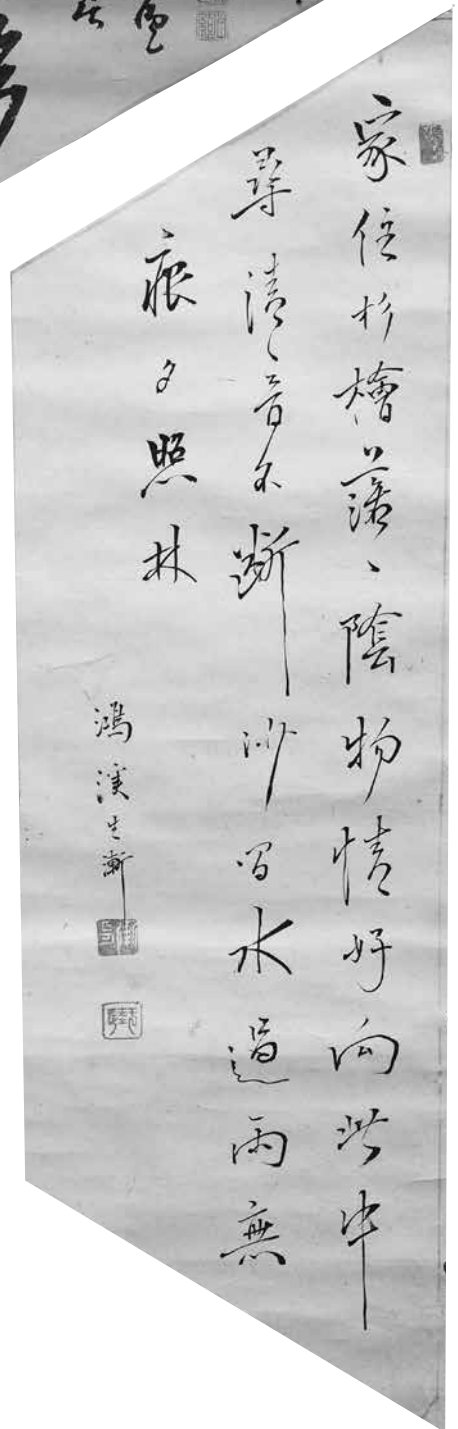
三浦佛巖書幅(掛軸卷子0111) 佛巖三浦端



19c 阪谷朗廬書
 (慶応元年(1865年)「儒者文人寄合書」のうち)
 (掛軸卷子0281)

阪谷朗廬(1822～1881、名は素、字は子絢、通称は希八郎)は、備中川上郡九名村(現井原市)の出身で、津山出身の昌谷精溪(1792～1858)や江戸の古賀侗庵(1788～1847)に学び、地元に戻り代官所が開設した郷校興讓館に学を講じた。明治維新後、広島藩から招聘され、甥の坂田警軒に興讓館を譲って赴任。廃藩置県後は東京に出て新政府に出仕し、明六社同人としても活動した。山田方谷・三島中洲らとは長年の親交があった。渋沢栄一との親交、縁戚関係も知られている(M)。

(翻印)「啼鳥呼残 夢東窓旭影和 茶煙輕起處 檐角得山多 乙丑春 朗廬」

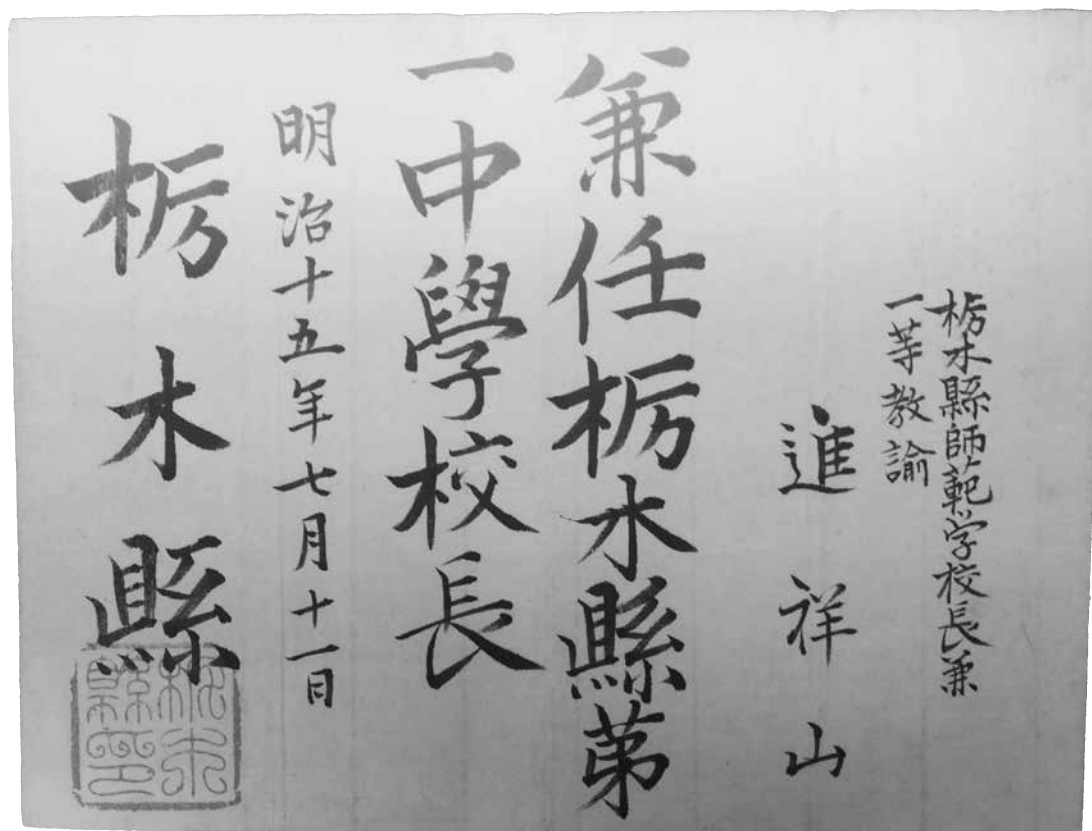
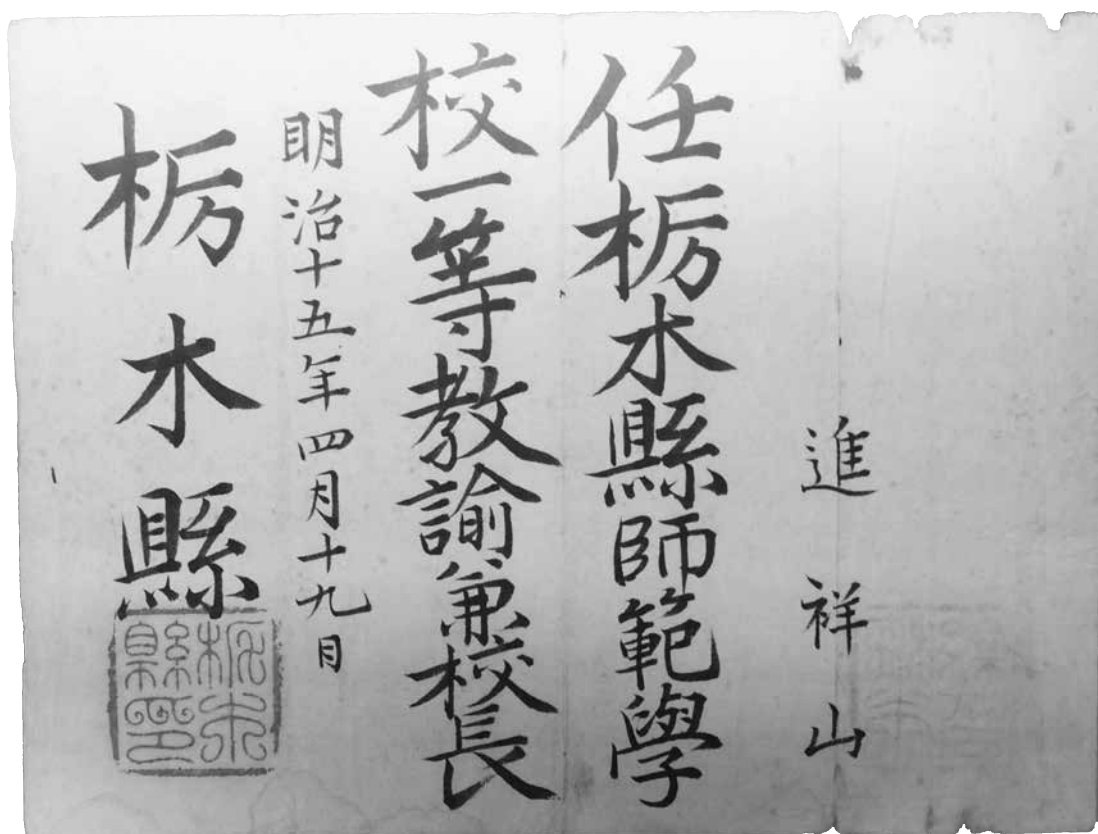


19d 進鴻溪書
 (慶応元年(1865年)頃「儒者文人寄合書」のうち)
 (掛軸卷子0281)

進鴻溪(1821～1884、名は漸、字は于遠、通称は昌一郎、別号は祥山)は、備中阿賀郡唐松村(現新見市)に出生し、新見藩の丸川鹿山、次いで備中松山藩の山田方谷に学び、江戸に遊学して方谷が師事した佐藤一斎に入門し更に昌平坂学問所に学んだ。帰藩後、有終館会頭・学頭などを歴任し、方谷の高弟として藩政に寄与した。

方谷門下では、三島中洲・川田甕江と並ぶ存在であり、漢文は中洲・甕江に及ばないが、漢詩の技量と学問は必ずしも両者に劣らないとの評価もある(『高梁二十五賢祭神略伝』)(M)。

(翻印)「家住杉檜落々陰 物情好向此中尋 清音不斷沙間水 過雨無痕夕照林 鴻溪生漸」

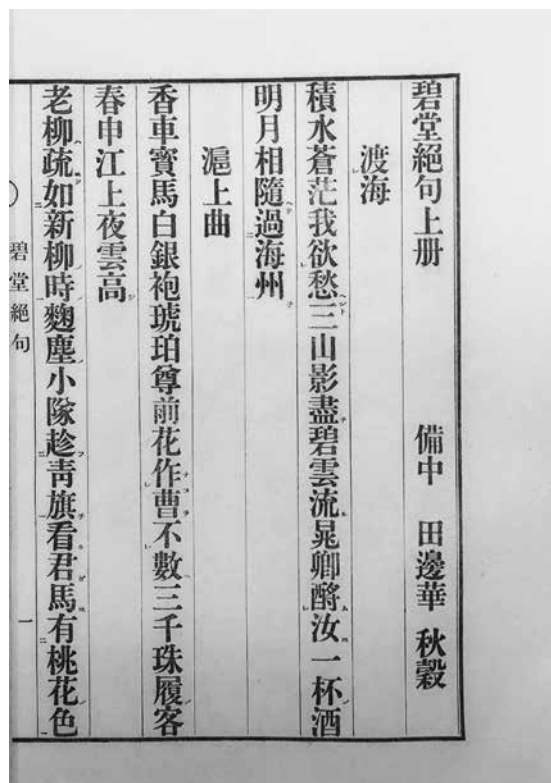
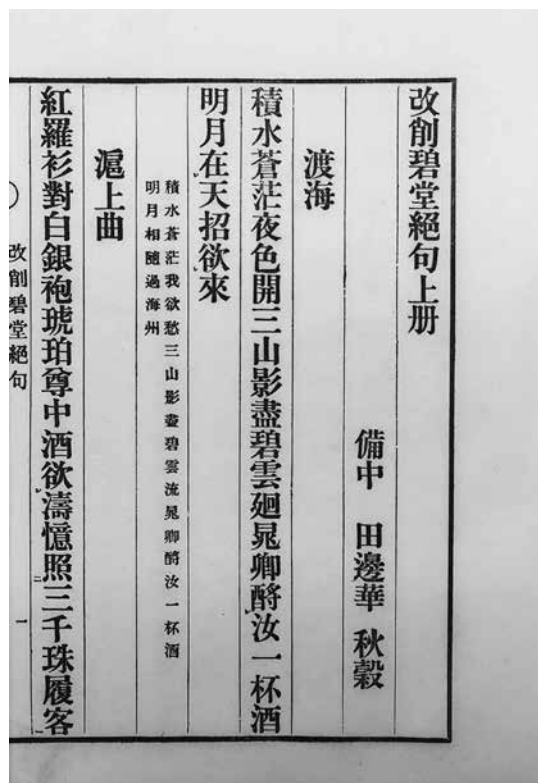
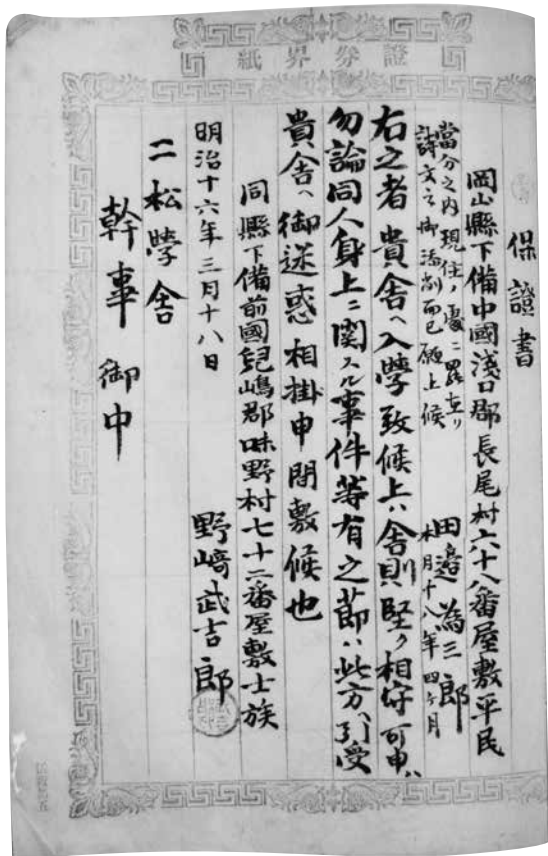


29 | 進鴻溪辞令 (進氏寄贈) (その他0017)

明治維新後の進鴻溪は必ずしも職位に恵まれず、堺県師範学校・栃木県師範学校など各地で教育に従事した。進が赴任した堺県師範には土屋鳳洲 (1842～1926、名は弘) が居り、栃木県庁には片山猶存 (1838～1895、名は重範) が居り、進の就職は彼らの斡旋によったと考えられる。土屋・片山は共に森田節齋門下であり、彼ら森田門下の漢学者たちは中洲や川田の交友圏内の人物である。中洲は進を信頼して長男桂の教育を託し、この年桂を栃木県に遊学させている (M)。

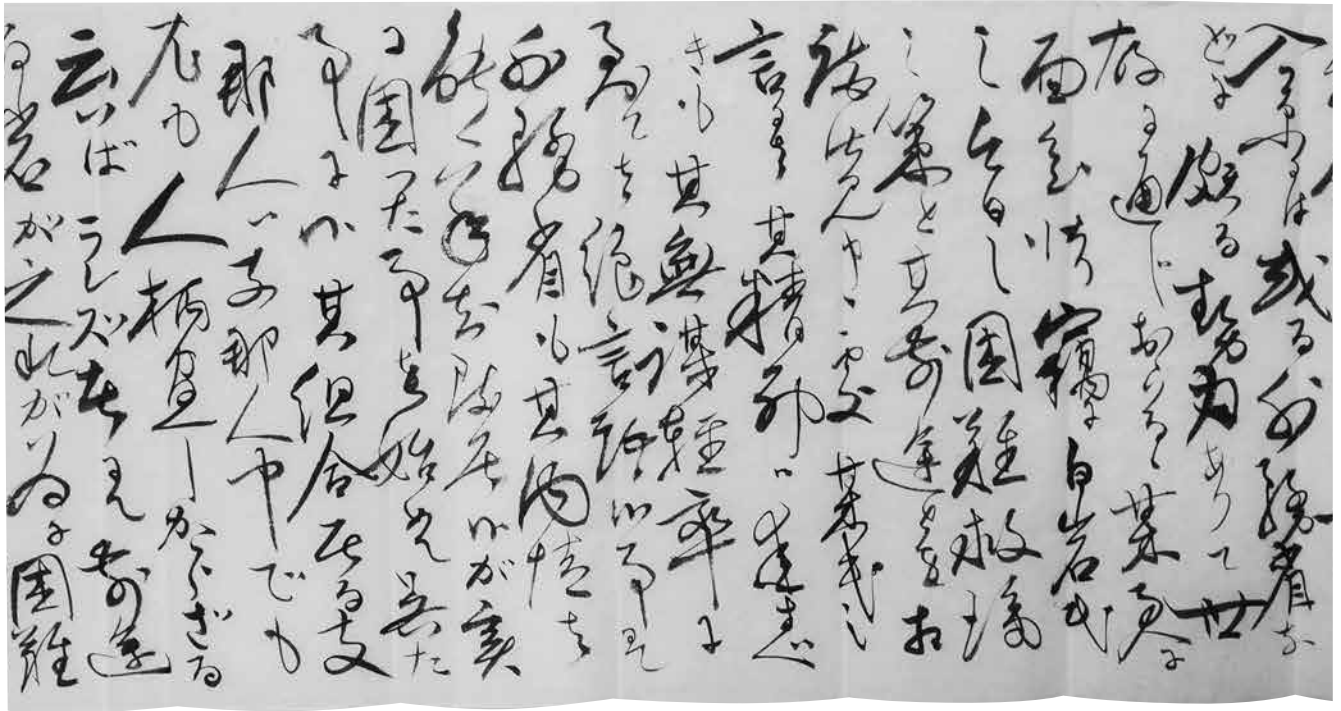
31 | 田邊碧堂入学願書 (二松學舎沿革資料0006)

田邊碧堂(1865～1931、名は華、字は秋穀、通稱為三郎)は、備前長尾に生まれ、二松學舎に学び、藩政期から製塩業により財を成した野崎家の執事を務め、野崎武吉郎(1848～1925)の側近として活躍し、大東汽船社長・日清汽船監査役等を歴任し、日中貿易の開拓に尽くした。また衆議院議員に当選すること二回。田邊は中洲とは遠戚にあたり、明治16年(1883)、19歳で二松學舎に入学する。展示品は『(二松學舎)入学願書綴』に含まれるもので、既定の文面に保証人の署名・捺印がある。田邊の場合は野崎武吉郎が保証人となっている。田邊は二松義会評議員を務め、後に二松學舎・大東文化学院などで漢詩を教授した(S)。



32 | 田邊碧堂『碧堂絶句』『改削碧堂絶句』各1冊 (1914年・1921年田邊為三郎刊本) ☆

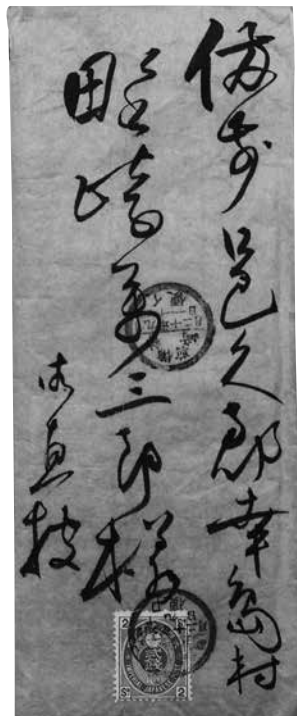
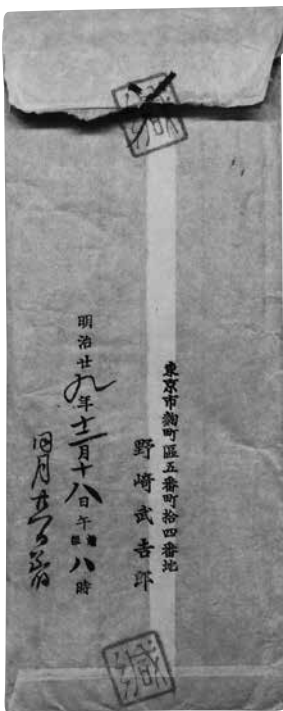
田邊は、国分青厓(1857～1944、名は崧・高嵐、字は士美、別号太白山人)に師事して詩を修めた。大正3年(1914)に『碧堂絶句』を刊行した後、青厓から添削を受けて詩が一変したため、青厓の序(1920)を付して『改削碧堂絶句』として再び刊行した。詩文・書画に長じた田邊には他に自作の『碧堂先生山水画冊』『碧堂先生画観』や、鎌田玄溪遺稿の選(『玄溪遺稿詩文抄』)などもある(S)。



33 野崎龍山書簡 (田邊碧堂代筆 野崎万三郎宛 明治29年〈1896〉12月18日付) (SRF新取資料)

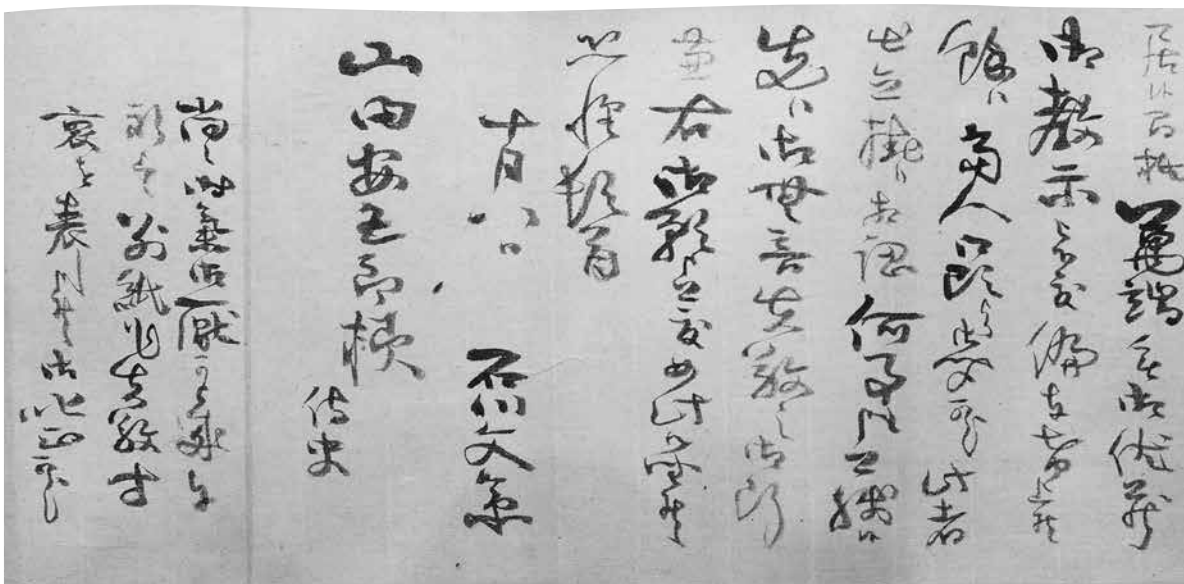
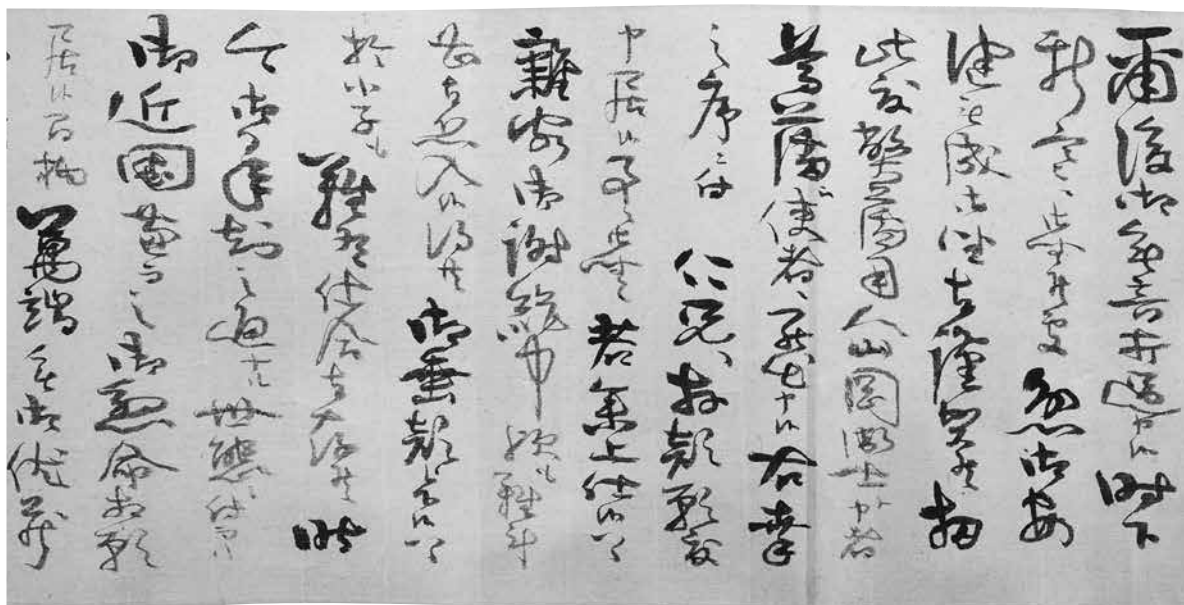
野崎龍山 (1848 ~ 1925、名は武吉郎) は、備前味野に大規模な塩田を経営して製塩業によって財を成した実業家。明治 23 年 (1890) に第一回帝国議会が開かれると多額納税者として貴族院議員に当選し、国政にも尽くした。また早くから対中貿易を構想し、白岩龍平の日清貿易研究所留学を支援し、日清戦争期には食塩の清国輸出を計画し、戦後台湾が日本領に組み入れられると台湾西岸で製塩業に着手した。野崎家は山田方谷・三島中洲と交流が深く、始祖野崎武左衛門の顕彰碑は山田方谷の撰文 (三島中洲代作)。中洲は子爵板倉勝達の三男勝輝を自分の養子として武吉郎の二女に娶わせ、中洲の三男復は妻美代を武吉郎の養女として迎えている。

また野崎龍山の側近には、前述の田邊碧堂と手島知徳 (1859 ~ 1907、号海雪) があり、ともに中洲の遠戚に当たり、二松義会時代に評議員を務めている。渋沢栄一が本格的に二松學舎に関与する大正 6 年 (1917) 以前において、野崎家は二松學舎の経営に不可欠な存在であった (M)。



(翻印) 「…小生去十五日入京仕候。過日は白岩氏之件に付、武田君へ御傳語被下、同氏之為に色々御配意被成遣居候由、小生も感佩之至に奉存候。頃日入京に付、或る外務省などに頗る勢力ありて世故に通じおらる、某君に面会仕り、竊に白岩氏之今日之困難救済之策と其前途とを相談仕見申候處、某氏之言には、其精神ハ愛すべきも、其無謀輕率に至ては絶言語候事にて、外務省も其内情は能く承知致居候が、実に困つた事を始めて呉た事に候。其組合居る支那人ハ支那人中でも尤も人柄宜しからざる、云ハばラレズ者にて、前途白岩が之れが為に困難之地に陥るならんと認め居候。折角外交問題として強硬手段も取りて勝利に帰せしも、実は不本意の事にて、全く支那人へ名と権力を貢ぎし譯にて、残念に外務省は思居候。支那政府も既に此内情は承知致し居、其支那人を自国之者ながら憎み居る風に候。今日之策は一応白岩氏帰朝して前途之方針相立てる外は有之間敷、此儘にて進行せば前途愈困弊可致見込、且西洋人なり支那人なり之競争も可有之、中々容易之業に無之故に、十分基礎を固め、相当之資本を注入せざる可らず云々と申され候。如何御考被為遊候乎。此話によれば、外務省も餘程心配して困つた事を為し居ると認め居られ候趣、一応帰朝を勧めては如何可有之や。内々御参考迄に申上候。書外は拝襟に申残候。…」

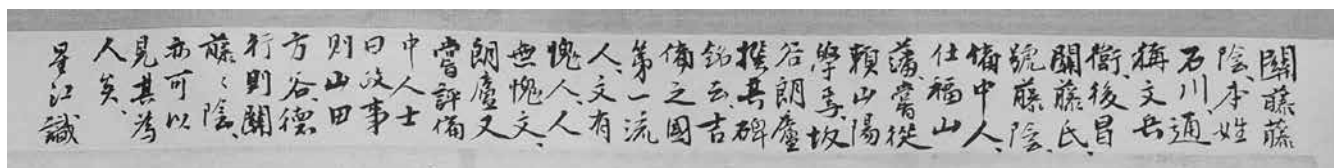
III <備後> 福山藩の漢学者たち



34 関藤藤陰書簡(山田方谷宛 某年10月8日付)(掛軸卷子0271)

関藤藤陰(1807~1876、名は成章、字は君達、通称文兵衛、一時石川氏)は備中吉浜(現笠岡市)の出身で、京都の頼山陽に学び、福山藩儒に登用された。累進して家老に上り、維新时期には藩主逝去と長州鎮撫使応接という同藩危機のなかで藩論をまとめ、広くその名を知られた。展示品は、福山藩から備中松山藩に使者として派遣した山岡衛士(後に謙介)を方谷に紹介し面談を申し込んだ書簡。困難な藩政を切り盛りする者同士、関藤と方谷の間に信頼関係があったことを伺わせる(M)。

(翻印)「爾後御無音打過申候。時下新寒ニ御座候処、愈御安健被成御座奉謹賀候。扱此度弊藩用人山岡衛士ト申者尊藩江使者ニ罷出申候。右幸之序ニ付、仁兄へ拝顔願度申居候事ニ御座候。若参上仕候ハ、雑客御謝絶中坎も難斗、甚奉恐入候得共、御垂顔被下候ハ、於小子も難有仕合奉存候。昨今御承知之通ナル世態ニ付而ハ、御近国兼而之御懇命相願居候間柄、萬端無御伏蔵御教示被下度、偏奉希上候。餘ハ当人口頭より御聞可被下候。此者出立掛り相認、何事も申上残候。先ハ御無音失敬之御断、兼右御願申上度、如此御座候。恐惶頓首 山田安五郎様侍史 十月八日 石川文兵衛 尚々時氣御厭可被成奉祈上候。別紙乍失敬寸衷を表し申候。御叱正可被下候。」



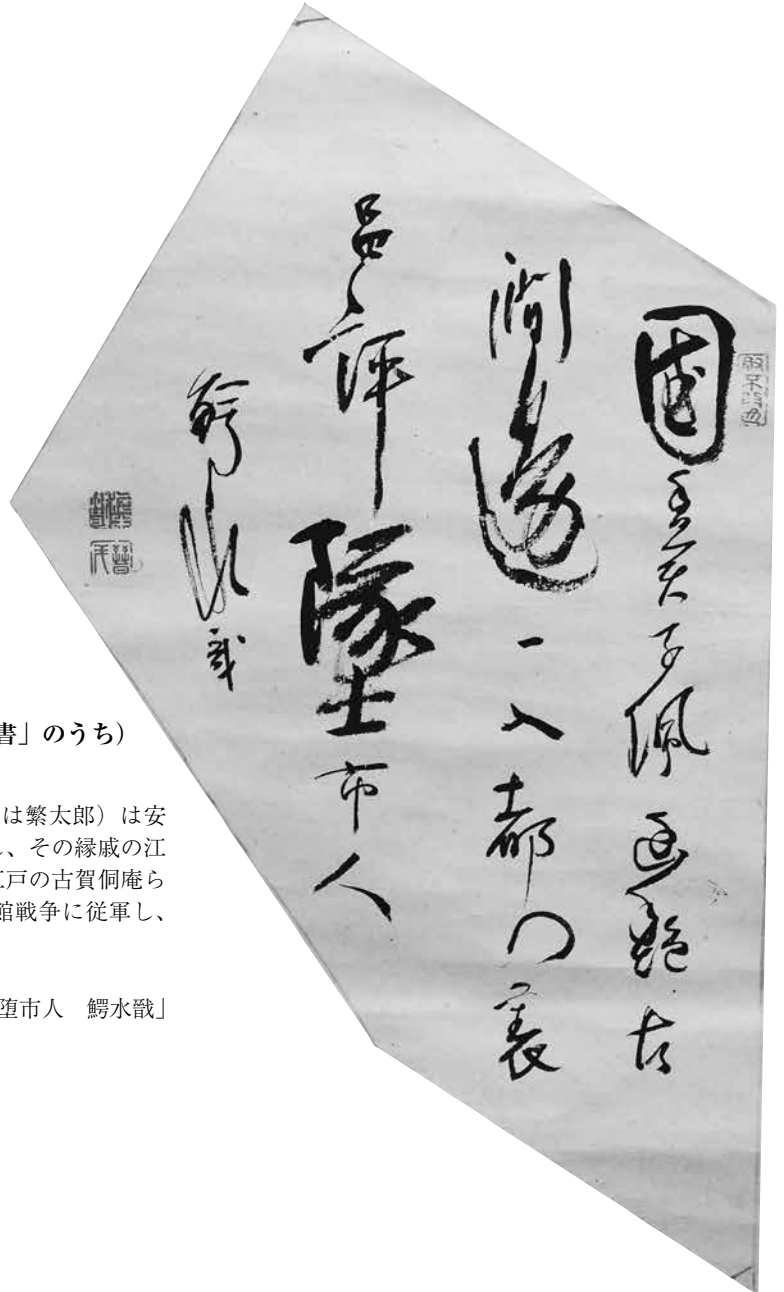
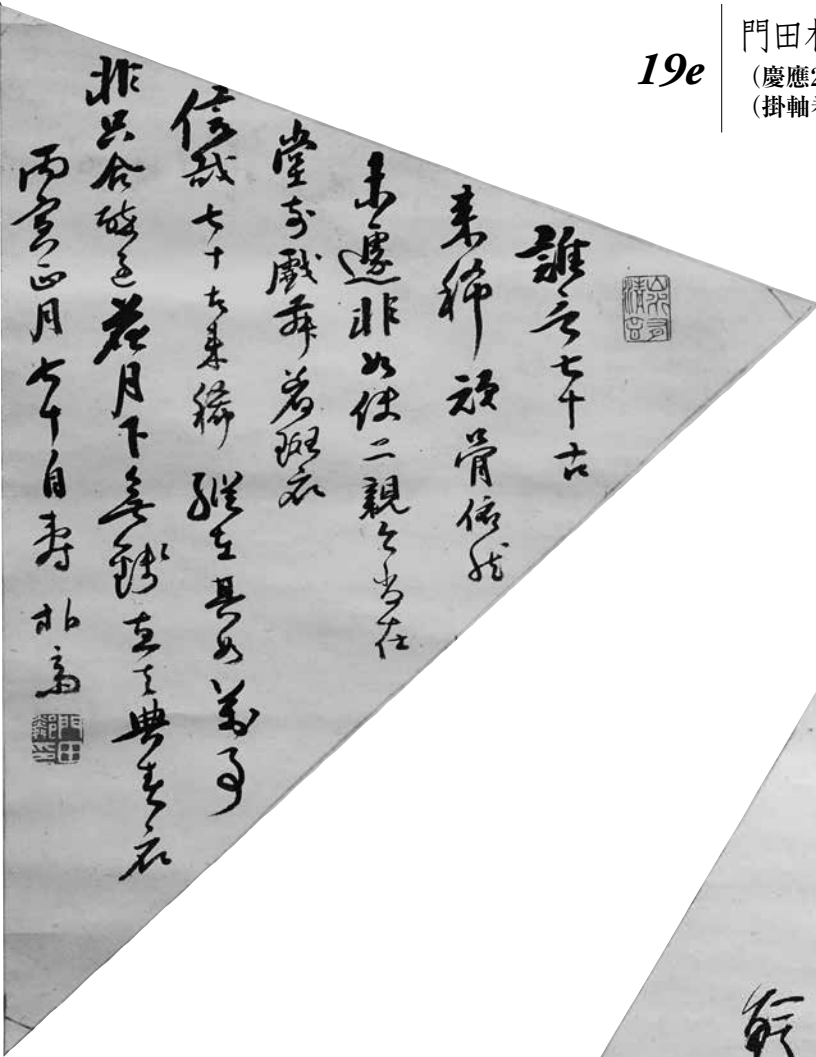
門田朴齋書

19e

(慶應2年〈1866〉正月「儒者文人寄合書」のうち)
(掛軸卷子0281)

門田朴齋(1797～1873、名は重隣、字は克佐)は備後安那郡出身で、菅茶山の廉塾、京都の頼山陽に学び、福山藩儒となった(1829)。初め江戸丸山の藩邸の学問所に学問を講じ、藩公の侍読を勤めた。ペリー来航に対して強硬な攘夷論を建言したため、侍読を解職となって帰郷した。文久3年(1863)、再び侍読に登用され、藩の学政に参画し、明治元年(1868)に致仕した(M)。

(翻印)「誰言七十古來稀 頑骨依然未遽非
如使二親今尚在 堂前戲舞着斑衣
信哉七十古來稀 縱在其如萬事非
只合醉過花月下 無錢患去典春衣
丙寅正月七十自寿 朴齋」



江木鰐水書

19f

(慶応元年〈1865〉頃「儒者文人寄合書」のうち)
(掛軸卷子0281)

江木鰐水(1810～1881、名は戩、字は晋戈、通称は繁太郎)は安藝の豪農層に生まれ、備後福山藩医五十川氏に従学し、その縁戚の江木氏を継承した。京都の頼山陽、大坂の篠崎小竹、江戸の古賀侗庵らに学び、藩儒となって藩校誠之館に学を講じた。箱館戦争に従軍し、廃藩置県後は士族授産に尽くした(M)。

(翻印)「國香君子佩 幽艶古澗邊 一入都門裏 品評墮市人 鰐水戩」

35 小島成斎書幅 ☆

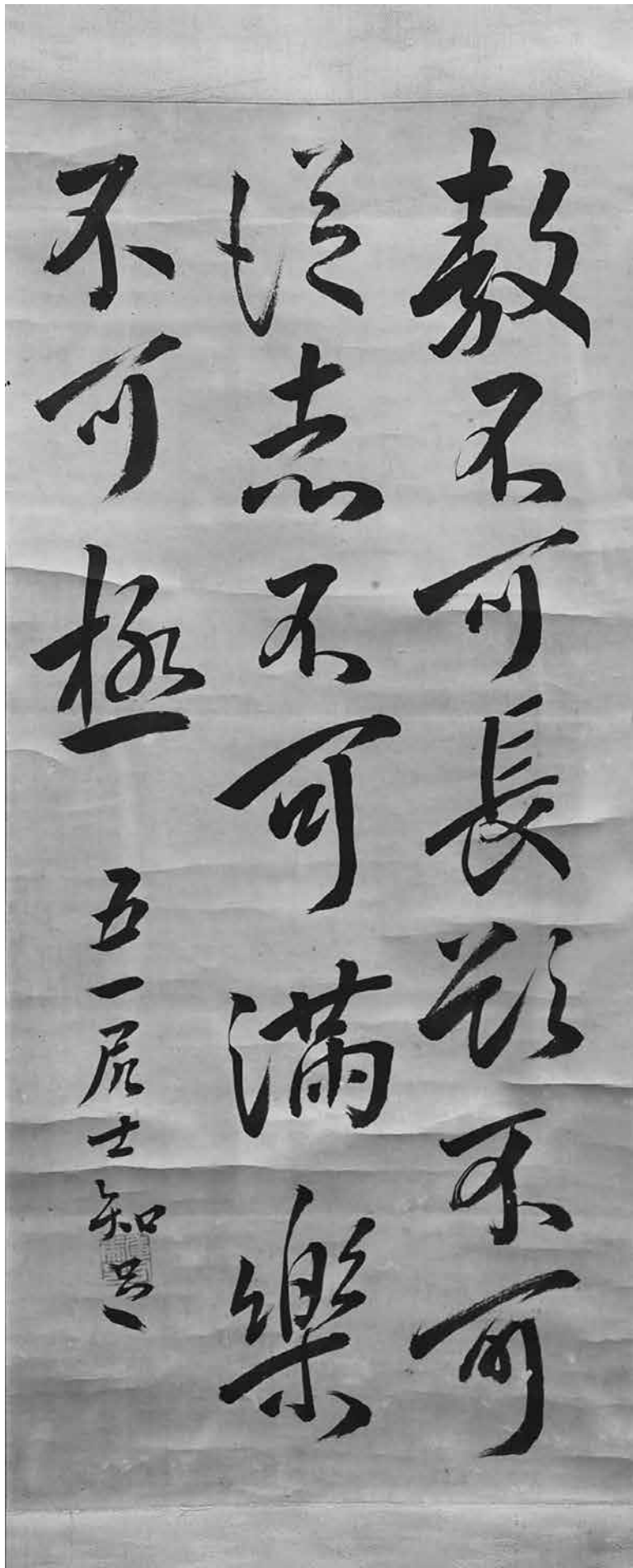
福山藩の漢学と言えば、上述の関藤藤陰・門田朴斎・江木鰐水らのような菅茶山・頼山陽の系譜をひく人物が想起されるが、これとは別系統の古学や考証学の流れもあった。伊藤仁斎の二男梅宇の家系が藩儒を歴任しているほか、山本北山門下の折衷学者太田全斎も藩儒となった。また森鷗外の史伝『澠江拙斎』『伊澤蘭軒』に登場する福山藩士・藩医らは高いレベルの考証学的業績を残している。

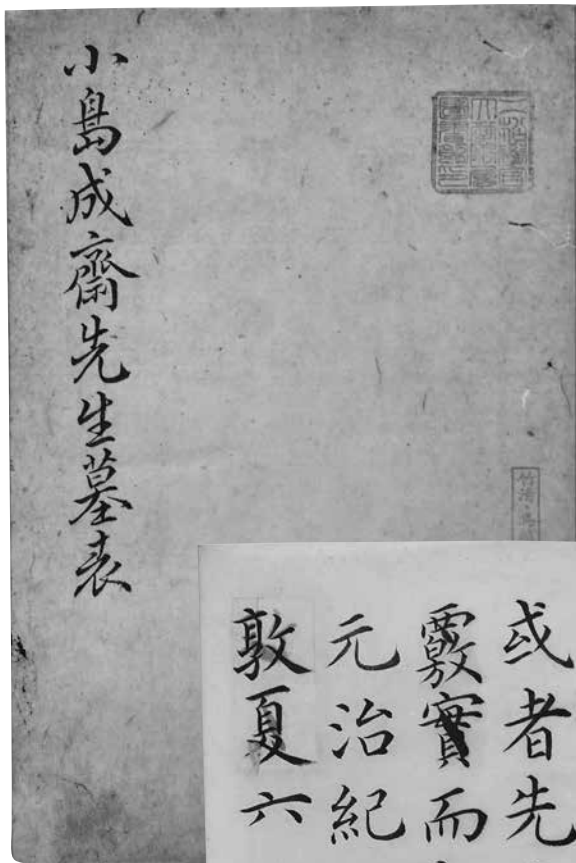
小島成斎（1796～1862、名は知足、字は子節、通称は五一、のち風翁と号す）は、福山藩士の家に生まれ、幼くして書に優れ、初め市河寛斎に詩を、その男米庵に書法を学んだが、後にこれを棄てて江戸の富商で考証学に長じた狩谷掖斎（1775～1835）の学問に服した。漢唐訓詁学の知識を基礎に日本古書の研究に向かい、『説文解字』や金石文から晋唐書法を講究し、中国古代の書法を自得するに至った。松崎謙堂（1771～1844）による唐石経の校勘・縮刻にも版下を揮毫した。小島にとって書はあくまで余技に過ぎず、経学は他に優れた学者もあるとの理由から、律令など日本古書の研究に傾注した。

小島の楷書には定評があり、嘉永中、藩主阿部正弘が老中の時、幕府からロシアへ返書を遣わした時、小島がこれを揮毫した。晩年に中風を患ってからは、顔法を用いた書を残している。小島成斎の書法を学んだ人物に、内田修平・野村素軒・高橋泥舟・松田雪柯らがある。

展示品は、『礼記』小学篇の語を書したもの（M）。

（翻印）「傲不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極。五一居士知足」





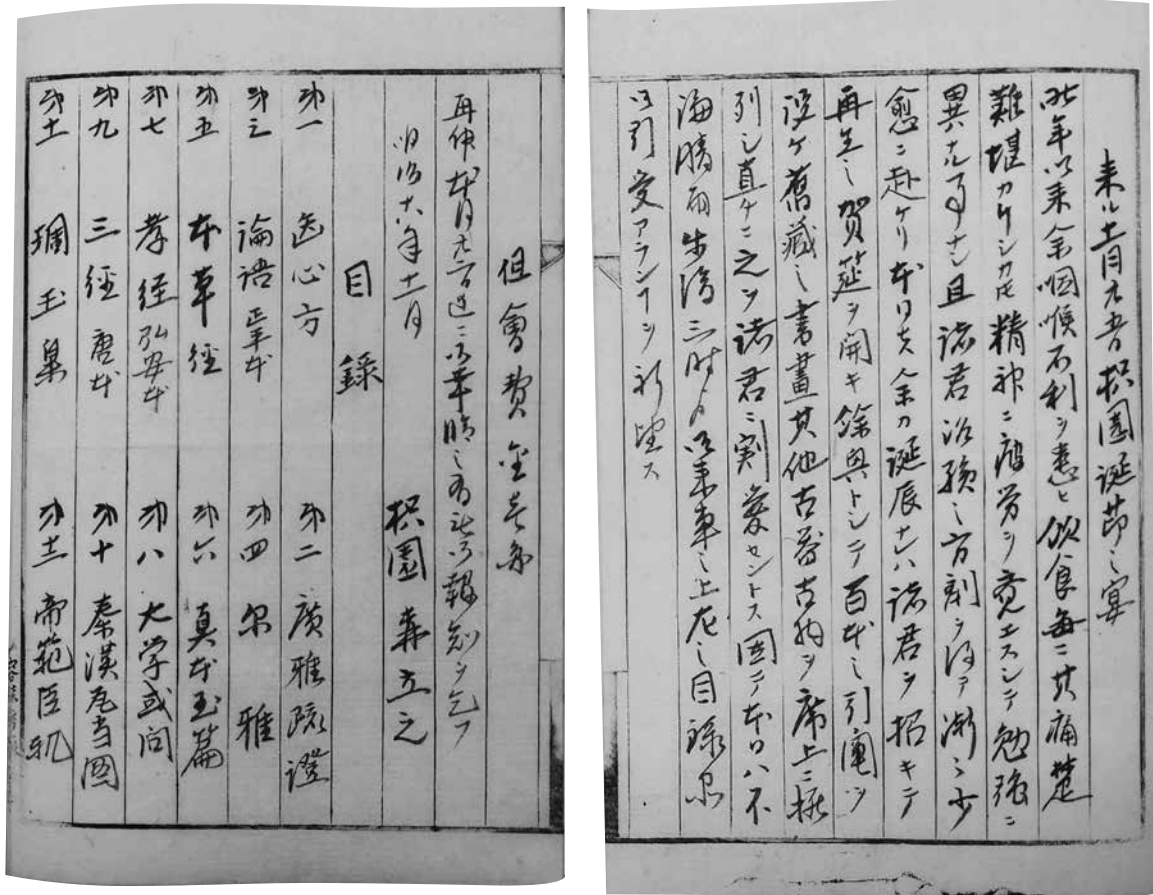
頓加光彩則雖不能文
 尚將揚權以後之人其
 或者先生之意歟爰為
 覈實而表之墓道
 元治紀元歲在閏逢困
 敦夏六月

小島成齋先生墓表
 上總海保元備製
 武藏内田正脩書
 自小學之失其傳六書
 之旨久成絕響近時唯
 有狩谷掖齋起而麾之

36

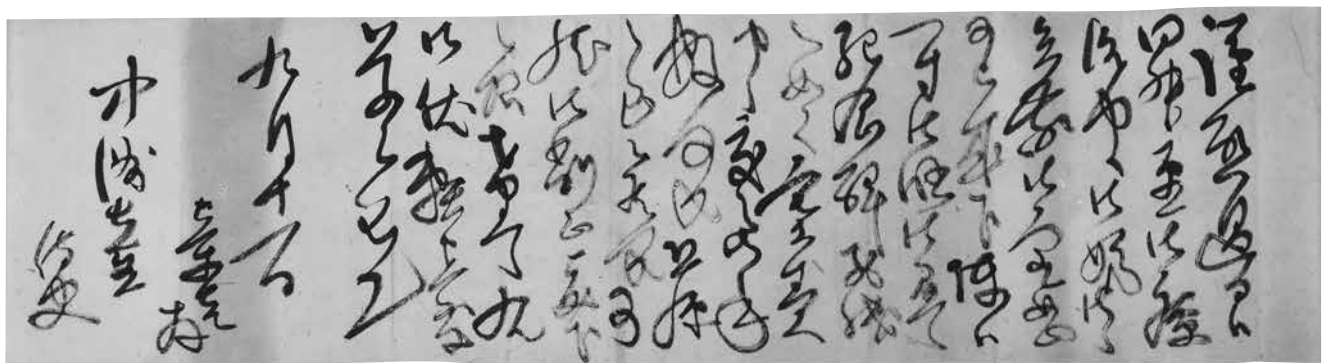
海保漁村製・内田正脩書『小島成齋先生墓表（小島成齋墓碑銘草稿）』
 元治元年（1864）成立写本 1冊（竹清馬越文庫）

海保漁村（名は元備、字は純卿、室号に伝経廬）は、上総の国武射郡北清水村（現・千葉県横芝町）に医家修之（恭齋）の三男として生まれ、文政4年（1821）江戸に出て、幕府御典医多紀元簡の長男元胤の知遇を得、多紀家と関係が深く、元胤の師である大田錦城に入門する。また錦城三男晴軒にも学ぶ。天保元年（1830）、江戸下谷に「掃葉軒」を開塾し、のち佐倉藩（千葉県）藩校「成徳書院」に出講、さらに安政4年（1857）には幕府医学館の儒学教授となった。門弟に島田篁村（重礼）、信夫恕軒、渋沢栄一など。その学問は考証学風で渋江抽斎、小島成齋などと親しくし、漁村は成齋の墓碑銘を製文している。展示品はその稿本（S）。



37 森枳園「枳園誕節之宴（開催案内）」（明治18年〈1885〉11月25日付）（竹清馬越文庫）

森枳園（1807～1885、名は立之、字は立夫、通称養竹）は福山藩医の家に生まれ、同藩の伊澤蘭軒や幕府医官多紀元簡、富商狩谷椽斎に学んだ考証学者。不行跡によって一時藩籍を離れたが、幕府医学館の古医書校刻事業に参加して実力を認められて藩籍に復し、また幕府医学館にも出講した。医学館の考証医学を明治期に伝えた人物で、晩年、得能良介に知られて大蔵省印刷局に奉職し、師友の遺著を整理刊行した。展示品は、死期を覚った森が78歳の誕生日に、架蔵する書画器物100点を籤引によって知友に割譲する宴席の開催を報じたもの。『経籍訪古志』の編者に相応しく、善本漢籍と古医書が並んでいる（M）。



38 濱野箕山書簡（三島中洲宛 某年9月11日付）（書簡0169）

濱野箕山（1825～1916、名は王臣、字は以寧、通称は章吉）は、福山藩士の家に生まれ、広島藩儒坂井虎山に学び、津藩遊学を経て、福山藩儒となった。維新时期には藩論を尊皇へ転換することに貢献し、誠之館を核とした藩学改革に尽力した。地方官を歴任した後、第二高等学校や陸軍幼年学校に漢学を講じた（M）。

（翻印）「謹啓、過日ハ昇堂、御療治中へ御妨仕候、失敬御宥恕可被成下候。陳ハ一寸御咄仕置候記念碑、別紙之如く塞責申候。度々御手教何分恐悚之至ニ候へ共、可然御削正被成下候様希上候。右御伏頼申上度、草々已上。九月十一日 章吉拜 中洲先生侍史」

参考資料

- 文部省『日本教育史資料』二、一八九〇
万波忠治『閑谷巖及門録』、一八九九
『閑谷巖史』一九〇二
三島中洲『中洲文稿』一、四集、『中洲詩稿』
三島復『哲人山田方谷』文華堂、一九一〇、復刻版二〇〇五
国分胤之『魚水実録』上下、旧高粱藩親睦会、一九二一、復刻版二〇一六
森鷗外『伊澤蘭軒』『澠江抽斎』
薇山先生追讃会『西薇山』温故社、一九三一
『三松學舎五十年史要』一九三七
高粱方谷会『高粱二十五賢祭神略伝』一九四四
山田準『山田方谷全集』一、三、一九五一、明德出版社復刻版一九九六
光田健輔『黎明期に於ける東京都社会事業と安達憲忠翁』一九五六、復刻版一九八七
内藤正中『自由民権運動の研究』青木書店、一九六四
『岡山県人名辞典』日本文教出版、一九六八
川田甕江遺徳顕彰会『川田甕江伝記』一九六九
中村義『白岩龍平日記』研文出版、一九九九
中山沃『備前の名医 難波抱節』山陽新聞社、二〇〇〇
石川忠久『三島中洲詩全釈』一、四、二松學舎、二〇〇七、二〇一六
中村義等『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版、二〇一〇
宮地正人『地域の視座から通史を撃て！』校倉書房、二〇一六
特別史跡閑谷学校顕彰保存会『閑谷学校研究』
三島中洲研究会『三島中洲研究』一、六

編集 後記

企画展「三島中洲と近代」は、大学資料展示室の発案により二〇一三年から当初三年計画で着手したところ、幸い好評を博し、二〇一五年から着手した私立大学戦略的研究基盤形成支援事業にもなつて学校法人と大学に所蔵する未整理資料の整理が進捗し、資料の寄贈・寄託・購入が増えたこともあつて、今回で企画展と図録刊行も「其六」を数えるに至つた▼明治維新一五〇年の記念の年を迎えた今年度は、文部科学省からの要請に応え、山田方谷と関谷学校など岡山の漢学に焦点を当てて幕末明治期を回顧することにした▼この六年間に企画展「三島中洲と近代」で展示し、また図録に掲載した資料は二七〇点を超える。その中には新出資料や初展示資料が多く含まれ、従来の研究で知られていなかった新事実の紹介も一二に止まらない▼これに加えて今回は、山田琢氏ご子孫、進鴻溪氏ご子孫、設楽氏（山田準氏外孫）ご子孫から新たに寄贈いただいた資料の一部を展示することができた。ご寄贈いただいた各位に厚く感謝申し上げます▼例年、企画展に合わせて講演会を開催してきたが、今回は八月四日（土）午後、「岡山の漢学者たち」と題して、小職による展示解説と、山田安之元二松學舎理事長による山田方谷についてのご講演と、横山俊一郎氏による泊園出身者と岡山に関するご講演を予定している。加えて、今回は岡山県高梁川流域の自治体による組織「山田方谷の軌跡（奇跡）実行委員会」の共催をうけて、地元岡山における山田方谷の顕彰活動についてもご報告いただく。ぜひとも大勢のご来聴をお願いしたい▼今回も展示と図録作成に当たっては、館長はじめ図書館の諸氏、丸善雄松堂の山崎和正氏に多大なご協力をいただいた。あらためて謝意を表する。

平成三〇年七月一〇日

文学部教授・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究代表者 町 泉寿郎

明治一五〇年

三島中洲と近代 — 其六 —

— 近代日本と岡山の漢学者たち

発行日 平成三〇年七月一〇日

編集者・発行者

二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「近代日本の「知」の形成と漢学」

本部 〒一〇二一八三三六

東京都千代田区三番町六一一六

事務局 〒一〇二一〇〇七四

東京都千代田区九段南二一四一四

印刷
製本 株式会社 サンセイ

